



我富士屋の吾妻に執心深く、今餘五郎が妻となりしを嫉くおもひ、朝鳥の刀を買取り、これを媒鳥となして吾妻をなづけ、餘五郎を誑き、偽りの刀を與へて去狀を取り、吾妻を賺し出して我隠家に連歸りしに、吾妻が我に靡きたる體をなせしは、刀を手に入れん爲の計にて、我に油斷をさせ、眞の朝鳥の刀と去狀を奪ひて逃出しゆゑ、ますます嫉く怒り迫り、餘五郎諸共打捨んと、彼所へ急ぐ道すがら、此處を過りしに、此に吾妻が噂あれば、何事にやと彷徨て委細を聞くうち、妹於關が自害の様子を見るに忍びず留めしが、これに付きて我身の懺悔おん聞きあれ。我志あしき故に、父の勘當を受け、其後漸次に零落して遂に野伏りの乞食となり、鎌倉を徘徊せしが、小動の駕籠の塵兵衛といふ者、旅人の忘れし財布の金をあらため居たるを、垣の隙より窺ひ見て、其夜塵兵衛の家にしつび入り、其金を奪ひ出んとせしが、十四ばかりなる娘の寢顔の美しさに暫らく見惚れ、頻りに嬋媛の心を動し殘多く逃出しが、彼奪ひたる金七十兩にて衣服腰刀を調べ、都

に上りて暫く彼地を徘徊せしうち、偶五條坂に到り、阿會比等のゆきかひを見物せしに、其うちにかの塵兵衛が娘あり、前に比ぶればなほ十分の美色を増せり。其名を聞けば富士屋の吾妻といふ、彼れ阿會比となれば我望を遂ぐるに安しと、喜しく思ひて富士屋に到り、吾妻を揚げて見えん事を望み、度々搔口説くと雖も、彼我を忌み嫌ひて、一夜の枕もゆるさざれば、ますます心を惱まし、何にまれ金多からではと惡念増長して、再び又鎌倉に下り、月影ヶ谷の軍用金千兩を奪取りし盜賊、其放駒の小柄の主は即ち是れ拙者なり。其後我吾妻が爲に、金銀を瓦石の如くすれども兎角靡されば、寧ろかれが身を贖ひ出だすにしかじと思ひ、かの千金を用ひんとおもひしに、雪の夜行方しれずなりぬ。今門外にありて此妹が物語るを聞けば、かの塵兵衛が娘は我妹の小蝶にて、我かの金を奪ひしゆゑに、其金の替りに身を賣りて、吾妻といふ阿會比となりし物語り、夫とは知らず我は又其金を吾妻が爲につかひ捨しも、皆是れ惡の報ひならん。しかのみならず塵兵衛を

現在母の後夫としらず、母にも面を合はさゞれば、彼所に居るとは露おもはず、妹小蝶は幼時他へ遣はしおきたるゆゑ、素より互ひに顔を見しらず。知らぬこと、は云ひながら、同胞の妹を戀慕ひ、種々梟惡をなせし事豈天罰をまぬかるべきかれ我を忌み嫌ひ一夜の枕もゆるさゞりしは、今思へばせめて、我幸ひにて、畜生道に陥ることは脱れたりける。因果は小車の不孝の罪の火の車、それに引替へ二人の妹は、孝もあり貞もあり、彼等にはちて年來の惡念を、今一時に翻へして、善に到りし此自殺、自らそれと名告りて出で、懺悔に罪を滅して死ねば、せめて未來は助かりなんと、云終りて於關に向ひ、これ妹今更めて兄弟の縁を斷りしぞ。これ露助、於關は我と兄弟ならねば、同じかざしの名は汚さじ、舊の如くに連添ひくれよ。又別に云ふことあり、奪ひたるかの千兩の半は其儘に船岡村の我隱家に残しあり、和主取りてかのおん館に返してくれよ、頼むくと云残して、刃に手を懸けきりくと引廻せば、於關は苦痛を見るに堪へず、悲歎の涙に咽か

へる、さすが強氣の堂左衛門、刀を投捨てかの土壇に這寄りて、自ら我襟髪をかきあげつ、いざ、餘字兵衛どの軍用金の盜賊を成敗して、おん身のあかりを立て給へと云へば、餘字兵衛目をしばた、き、都が爲に打るべしと思ひし我は打れがたき義理出來り。圖らずして懐に入窮鳥を手にかくるも、私ならぬ世の掟はせん術なし。南無阿彌陀佛と聲諸共に首打落せば、於關は軀に取付きて、聲を放ちて泣き叫ぶ。老母淀瀬も露助も、暗に落涙したりけり。かくて餘字兵衛堂左衛門が首を取上げて露助に對ひ、我此首を取おさめたれば、汝が首の質物は其儘返し遣はすなりとて、質物の證書を投與へ、前程返せし此五十兩の金は、堂左衛門が葬ひ料に遣すとて、金の包を於關に與へ、さて堂左衛門が首に彼小柄の小刀をさし貫き、首桶に載せて母の前にさし出し、いざ軍川金の盜賊の首おん受取下さるべしと云へば、老母はうち點頭き、此首を受取れば、我がうけたまはる役目も濟み彼の襟をつく五月雨に、汝が着たる濡衣も、今脱ぎ捨てあきらかなりとて喜ば

餘字兵衛また露助にむかひ、我曾て剃髮の望ありと雖も、都が爲に打たるべき心ありしゆえに未だこれを遂げず。今汝が刀にて我鬢を切り、せめて都が恨を晴さん、母人さま家督の儀は餘五郎に續がしめ給ひ、拙者には剃髮をおん免し賜はるやうに、父上に願ひてよと云ひつ、露助が刀にて鬢を切りはらひ、今より祖父の法名浮閑の一字をとりて、山咲窓閑と名を更め、神祇釋教戀無情を、狂言綺語に取り做して誹諧の連歌といふ一派をひらき、讚佛乘の因となして、都が菩提の爲にすべしと云ひ終りて、片手に手燭片手には、斬りたる鬢を握りつ、庭下駄を踏鳴らして、飛石傳ひに池に臨み、手燭をあけて水鏡に面を寫し、嗚呼病に惱みて我ながら、見違ふばかりに衰へたり。

窓閑が姿を見ればかきつばた。

と口ずさみたるが、再び又一陣の風おろし來て、庭木の梢を吹鳴らし、池水皺して愁ふが如く、忽ち紫燕の花搖動して、一道の炎火閃々と燃え上りたれば、手燭

を撲地と取落し、又ふるひ出す瘡病に、身内わな、き足軟ぎて、うち倭燈を踏しめつ、吐息さへも苦しげにて、炎火にむかひ、

のまんとすれど夏の澤水

と高らかに脇匂を吟じ、恨を晴して成佛せよ、南無阿彌陀佛と唱へつ、手に持ちたる鬢を池水に投入るれば、又燕子花ゆらくと動きて花の裏より紫雲を生じ鬢鬣として空にたなびき、一羽の時鳥飛び出て、一聲鳴きつ、光を放ちて西の空に飛去りぬ。此時窓閑が胸中忽ち朗になりて、病も頓に癒へたりけり。是れ都が怨靈窓閑が一句の妙に感服し、恨を晴して得脱し、成佛したるに疑ひなしと、露助於關愁ひの中に喜びを交えたり。鬼神の心をも感ぜしむると云へるはかゝる類ひなるべし。窓閑又母にむかひ、おん聞及びも候べし、主君判官の御秘藏に、二振の劍あり、其一振は小鳥になすらへて朝鳥と名給ふ。これ日中の跋鳥に象どりて陽の太刀なり。今一振は此蛙鳴丸にて、これ月中の蟾蜍に象どりて陰の太刀

なり。おのれ少年の時主君より拜領の劍なれども、かく姿をかえて隠者となれば用うべき所なし。これを餘五郎に遣はされ下されかすと云ひてさし出せば、母は益々感歎す。かゝる折しも門外におん迎ひ候と呼りて、淀瀬が従者等提燈把つて來りたれば、老母は首桶と蛙鳴丸を携へて立上り、我は一旦旅宿に歸へるさらばくと別を告げしづくと歩み出て乗物り移りたれば、窓閑露助於關も共に門送りす。此時露助南方十字兵衛が忠死のことを語らざるは、これを語れば十字兵衛が志しを失ふ理あればなるべし。さらぬだに短夜なれば、はや曉に近かるべし。夜の明けぬ間と窓閑は、露助於關に下知をなし、空櫃を假の棺となして、堂左衛門が軀をおさめせ、ねびれたる二人の僕をよび醒して擔しむれば、露助夫婦は左右にそひ、鳥邊野さして出ゆきぬ。窓閑は其跡を見おくりて、袖白妙の卯の花の、雪の夜もしらぐくと、明るるしの、めの朝紫の、杜若の花も悟の心開けて、すはや今こそ草木國土、すはや今こそ草木國土、悉皆成

佛の御法を得てこそ、失せにけれ。

と諺曲杜若の切を語ひつゝ、歎息して一間の裏に入にけり。時に又池のあたり籟々と音しけるが、燕子花の茂りあひたる裏より、衣服は更なり、覆面頭巾、丸縫の帯、手覆、裏脚に至るまで都て一樣の紫に打扮たる忍びの曲者あらはれ出て四邊をうかひひ拔足しつゝ、亭坐敷に上りゆきて、彼處にありし朱塗の手箱を奪取り身を轉して出んとす。窓閑は奥の間より出來りこれを見つけて呼戻せば、曲者は刀を抜きて斬りつけたり。窓閑は身をひねりて、手早く刀を打落し、朱塗の箱を取戻して、腕ねぢ上げつ、唯一言紫の朱を奪ふを憎むといひて引据えける時、忽ち烏鳴きて夜はほのくくと明けわたりぬ。此曲者の謂、並びに彼箱の裏なるは如何なる物といふ事、六の巻にしるして詳なり。

卷之五

十二 窓錢のうき世をはなす主人の合力

扱も南方十字兵衛が兒子南餘兵衛は、母眞弓一子窓太郎もろともに前の年鎌倉を阿呆拂ひになりて彼郷を立退き、身をよする蔭たになければ、一所不住に伶俚ひけるが、母いひけるは、夫十字兵衛どの不忠をなし給ふうへに、自ら刃を以て非命に死し給ひぬれば、冥途の苦患もさぞかしと思ひやらるゝなり。故に今よりおもひ立ち、西國順禮してせめて夫の罪障を消滅し、佛果を得給ふよすがにもと思ふなれど、我老いて足弱ければ、遠國の歩行かなはず、これを如何にせんと打歎きいふ。南餘兵衛は元來孝心深き者なれば、母の望を遂けしめんと思ひ、そはよきおぼし立に候、如何にもしておん供いたし候べしと云ひて頓にうけがひ、少の貯へを出して親子三人着すべき禪衣小笠手覆裏脚のたぐひの旅の具を整へて豫

め其支度をなし二箇の簀をつくり、前に母後に子を乗らしめ、摠擔を以てこれを荷ひ、長き旅路に出立ちけるが、少の路銀も早くつかひ盡しければ、道すがら往來の旅人に一錢二錢の情を乞ひて、其日々をおくりゆきぬ。されば南餘兵衛うだひも馴れぬ順禮歌をうたふに、自ら謠曲の節のまじれるも理なり。母は馴れたる聲の齒をもちてうたへば、窓太郎は順禮に御法施と、舌もまはらぬかたことの聲いと哀れにて、わきまへのなき幼子の、父親に荷れながら、柄杓打ふる片手業に風車まはしつ、遊ぶ體を、見る人毎に涙を落し、情をかけぬはなかりけり。かく物を乞ひつ、行旅なれば道もはかどらず、木の實を拾ひて飢をしのぎ、流を掬して湯をたすけ、野原の露に袖を片敷き、木の下草にひれ臥して夜を明すなど、悲しき事の數々は、云ひ盡くされぬ旅なれども、御佛の擁護やありけん、恙なく日數を重ねて、三十二ヶ所の靈場を廻り、第三十三番目美濃の谷汲に到りて満願し、夫より又都の方へ上りゆきぬ。俊成卿の歌に「よろづ代に千代をかさねて八

幡山、君を守らん名にこそ有りけれ。」と詠せられし八幡山は、京を去ること四里餘にして、則ち山城國の南界なり。當時男山護國寺の本尊、白檀の薬師佛開帳あるによりて參詣の人群集し、綿々絡繹として往來しばらくも絶えず、いと賑けるにぞ、是に乗じて利を得んと思ふ者、此處彼所に假家をつくり、酒肴饅飩可漏子を商ふ家あり。砂糖饅頭齋饅頭餅菓子を賣る家あり。心太賣の店には大機關に巧を盡し、花賣の軒には青柳の絲を靡かす。山崎の小櫃の繪も深草焼の彩色にけおされ、糰餅の螺の形も編笠焼に像を奪はる。賣卜は著を捻り、藥賣は長劍を撫す。宇多天皇に十一代の後胤伊東が嫡子とうたふ曲舞女あれば、蟹の燒藻の夕煙とうたふ琵琶法師あり。福廣聖の辻談議、妙高尼の針供養、鐘鐺の勸進高足駄の行者綾織、八から鉦の類さへ、おのがさまよく集り立てり。幻戲、刀玉、縁竿のたぐひの奇妙の術を施す者は更なり、一寸法師の蠅娘舞、輕業の骨なし骨あり。伊勢國より活捕りて來つる鬼女、親の因果の子に報ひつる蟹滿寺の蛇女、猿の俳

優、犬の籠脱、頼政が射て落しつる鶴、廣有が箭にかけつる怪鳥のたぐひは更に奇らしとせず。若狭の八百比丘尼が嘗殘しつる人魚、朝比奈の三郎が捕へ來つる焔魔鳥など、見も及ばぬ鳥獸、聞きも傳へぬ騎人、あやしとあやしきものを見する假家、所せきまで立ならびて、縹の幟野交の幕、片々として風にひるがへり、楊弓の音辻打の、太鼓にまじる噴响の笛、喧く聞えて、諸人の耳目を驚ろかしむ。かゝるなかに薦簾掛け、假家つくりて外の方に怪しき獸の形を拙きたる招牌をか、け出したるあり。片膚ぬぎたる男戸口に立ち、扇を開きて往來の人をさしまねてつ、聲高やかによびひ云へるは、これ此招牌を見給へ、そもこれは雷獸といふものにて、雷につきてありく獸なり。これは安房國二山の雷狩に活捕り得たるなり。これ見給へ家土産によき語柄ぞ、招牌に露ばかりもいつはりあらば錢取り候まじ。見給ひて後おこしねと、聲枯、ばかり言れば、見物の諸人蟻のごとくに集ひ蜂のごとくに群りて、假家の裏に入り、此方おし彼方おし犇めきあひぬ。

かくて日も西に傾きければ、參詣の諸人足を早めておのがさまへ家路を急ぎて歸り行きけるが、忽ち寂寞として跡に残れる物は、早瓜の皮の脚手の形したる、魚の骨の野晒しめきたる、懐紙の屑、縞紙の塵、破れたる履のたぐひのみなり。前程より彼假家のほとりに物乞ひ居たる勸進聖、あたりになきを見て彼方をさし招きければ、笠深く着たる煎じ物賣、荷を擔ひてこゝに來たる、彼勸進聖頭髪をかくせし頭巾を取れば、是乃ち箕腹蟻右衛門なり。煎物賣笠をとれば、是乃ち袴田紺九郎なり。さて蟻右衛門四邊を見まはし聲をひそめて云へるは、おのれ鎌倉より貯へ來つる路用の金を五條坂にてつかひ果し、思ひがけず俄に浪々の身となりつれば、他國へ立退くべき路銀なくせん術もなければかく姿を扮し、物乞をして徒らに日を送るなりといふ。紺九郎いへるは、おのれも左の如く貯なきゆゑに、かく煎じ物賣となりてさまよふなり。かくては隠謀を企てつる甲斐もなし。かの蛇ヶ谷の老女今しかくの所にかくれ住むよし、且づ路用の金を得る良計を

施して彼所に去き、老女にしたがひて宿望を遂ぐるにしかじと、兩人語り居たる處に、蟻右衛門が奴僕沙土七忙はしく來り、兩人に向ひて云へるは、去年五條坂にて再會の所は斯様くと宣ひしゆゑ、彼所にありて數月待侘候へども、音信だにしたまはざるゆゑ、やむことを得ず再び上りて、所々を徘徊し、おん行方をたづね侘候。他の事はおきて且づはやく聞えあぐべきは、山咲庄司頃日上京して、おん兩處を捕へんと忍びぐに尋ね候よし、御油斷あるべからずといふ。蟻右衛門これを聞きて打驚き、しからば此地にも長居はならずと云ひて當惑の體なり。紺九郎いはく、庄司京都に逗留して居るとならば、我々兩人不意を襲ひて打取るべしといふ。蟻右衛門頭を振りていはく、いなく彼は無雙劍術の達人なれば、容易に手を下すは危し、欺打にするに如くべからずといふ。沙土七又いへるは、山咲餘五郎狂氣して此邊を狂ひ歩き候よし、庄司を打つ思召しあらば彼をも打給へ、生けおき候ては狂人と雖も後日の害なるべしと、未だいひも了らざる

に氣狂ひよ泡齋よと、童等のいひ囁す聲聞えければ、沙土七彼所を願て、かれは正しく餘五郎に候はんといふ。蟻右衛門いはく、しからば汝面をかくし、暗に彼を打捨てよといふを耳につきて耳語ければ、沙土七は打うなづく。蟻右衛門は紺九郎を伴ひ、つひに此處を立去りぬ。沙土七は頬冠して面をかくし、裙端折て帯に高くかいはさみ、刀の目釘をくひしめし、假家の蔭に身をよせて待居たり。さて餘五郎は堂左衛門が善心になりて腹切りしことは露しらず、彼が行方を尋ぬるために偽狂人となり、髪振亂し竹の枝を打かたけて、足もしどろに狂ひ來る。後につきたる童等口々に言言りて打笑へば立留り、童等何笑ふ、物狂が可笑しいとや、うたてやな、春にそだつも花さそふ、菜種の因を蝶しらず、菜種は蝶の果をしらず、藻に住蟲のわれからと、狂ふ袂に風の葉の、亂れて露のおきもせず、寢もせでむすぶ夢心とうつ、なきこといひて、泣きつ笑ひつ伏轉ぶ。童どもよ立去りて、折よしとや思ひけん、沙土七は物蔭よりあらはれ出で、唯一打と斬りつく

れば、餘五郎はむくと起きて身をかはし、聞きやいな、うはの空なる風だにも、松に音するならひありと云ひつゝ扇をひらめかして、又きりつくるを拂ひのけ、眞葛が原の露の世に、身をうらみてや明け暮れんと、云ひつゝあしらふ扇の手練こなたは汗もしとゞにて、秘術をつくせども手にあはず、頭をのぞめば身を沈め裙を拂へば飛上る。閃めく劍は雲の電光、餘五郎が身の働きは、波上の燕子に異ならず、狂ひめぐり駈けめぐり、一ツ所をいく度も、ゆきては歸りかへりては、又行雲の旗手より、折からおとす青嵐に、梢木の葉もはら／＼と、淀の川音さ／＼と、雲の端袖もひら／＼と、彼方へなびき此方へなびき、狂人走れば不狂人も、打洩らさじと早足を出し、あとをしたひて追ひゆきぬ〇時は五月の半なれど、送梅雨も降らずよく續きて、天氣快晴なりしが、此日は夕方より雨を催す雲起りければ、道行く人も家路を急ぎ、往來絶えたる八幡堤に、編笠深く着たる武士、一僕具して歩み來り、辻に立ちたる石地藏の蔭に立やすらひて僕を近づけ

何にかあらん耳語ければ、僕は手を押揉みつ、仰せの如く今朝ほど計ひ候といふ。かの武士はよし／＼といひて打うなつき、又何やらん耳につきて耳語、懐より金財布を取り出して渡しけるが、僕はこれを受取りてうち點首けば、かの武士はもと來し道へ歸りゆく。僕はあとに止まりて金財布を掌にのせ、重量を試みて獨言に云へるは、さて石瓦とちがひ金の重量は別なる物ぞ、五十兩といふ金を僕の我にあづけ給ふも、我正直をしり給ふゆゑならめ、人は日來が大事なりと、無益ことを咥く折しも、沙土七は餘五郎を見失ひ、この隈かしの隈に目を配りつ、此處まで尋ね來しが、かの僕が獨言をいふを聞きて暗に喜び、稻村の蔭に立かくれ、なほ様子を窺ふをりしも、暮六ツの鐘鳴ると耳に近く響きければ、かの僕は心づき、財布を懐におし入れて、足ばやに走去んとしたる處に、沙土七つと出て行先に立塞がり、物だに云はず彼僕が懐に手をさし入れ、財布を掴みて引出せば、彼僕は沙土七が腕を捉へて財布を抜き取り、臆の太き盜人め、我命よ

り猶大切な此財布、汝にとられて濟むべきか、妨げせば一打にすぎ、其處退て通すまじきやと、一腰の柄に手をかけ、臂をおし張りて言れば、沙土七は盧胡毒蛇の見いれし其財布、とく／＼渡せと呼はりて、又財取を奪取り、逃去く足に取つきて引戻し、取返さんと捻合ひしが、沙土七が一身の貪慾手頭に凝あつまりしにか打てど擲けど財布を放さず、互ひに双袒おし脱ぎて髻をつかみ合ひ、或は倒れ或は起き、上に重り下に敷かれ汗もしとゞに息もつきあへず、力を盡して揉合ひぬ。かくありける時男山の見せ物師等、錢箱木戸札大鼓噴哨の類ひの見せ物の具を携へて歸道、丸木をもつて造りたる圈の裏に彼雷獸を入れこれをさし荷ひにして來りしが、はや黄昏のほの闇き裏に、組みつほぐれつ争ふ此方の二人に撲地と突當りぬ。此方の二人は暗き裏に見せ物師等を互ひに相人と思ひたがへて、或は踢倒し、踏倒しければ、見せ物師等はこは狼藉者よ醉狂人よといひて睨て惑ひ、脱けつ潜りつ、身を避んとす。彼僕は忙はしきうちに、見せ物師等を盜人の



加勢ならめとなほ思ひ違へて、一腰を拔放して打振りける。其刀の光り暗裏に閃めきければ、見せ物師等はこれを見て膽を消し、雷獸の圈を其儘地上に捨置きてぞ逃去りける。沙土七も刀を抜き、刃先もしどろの探り打ち、空に閃めく電の、光をしるべに打ちむ刀、丁ととして打合ひしが、勝負つかねば刀を投捨て、なほ財布を引合ひて、取りつ、取られつ、争ふ時しも、電光いそがはしく閃めきて、雷聲と鳴出しけるが、彼雷獸雷氣に催されて忽ち勢猛くなり、繋ぎたる鐵の鎖をひき切りつ。さしも堅固につくりたる丸木の圈をめりくと押破りて躍り出で、總身の毛を逆立て鼻を吹怒らし牙を咬鳴らし、眼中より光を放つて狂ひめぐりければ、二人の者は大に驚き身を避けつ、なほ財布を争ふはづみに、財布の紐雷獸の首にひき掛りければ、二人の者はこれをとらめと恐るく追めぐりける時、雷聲漸く近く鳴りて、空より一むらの黒雲まひさがり益暗くなりて黒白もわかたざりしが、雷獸は此雲に飛上り、首に財布を引掛けたる儘にて、矢を射る

如くに天上してけり。かの僕も沙土七も電の光に就きて空を見あけ、これをしたひて追ひゆかんにも、翼無ければせん術なく、唯惘然として立居たりしが、兩人一度に尻居に倒れて、大息つきてぞ居たりける。○夫孝は百行の先なり、孝天に至る則は風雨時に順ひ、五日に風吹き十日に雨降る孝地に至る則は萬物化盛し、草木もよく花咲き實り、五穀豊饒なり。孝人に至る則は其家に衆福來りて、貧人も忽ち福者となる、古今其例すくなからず、されば孝行の徳の尊きこと譬ふべき物なし。孝なる人は天の憐を蒙りていみじき福をうけ保ち、孝ならざる人は天の憎みをうけて恐ろしき災にあふこと影と響の如し。原孝の字をつくるに老の字のかたへを省きて子の字を添えたり。是老ひたる父母の傍に子ありてよく仕ふるを孝とするの謂なり。老ひたる父母を持ちたる人、此字の形に習はずんばあるべからず。去程に南餘兵衛は、西國順禮をなし終りて母の願望を遂けしめ、それより山城國に到り、狐川を左にとり、河内へ越ゆる拔道の村末に、人の住荒したる古

家を借り、母子三人暫く此に月日をおくりぬ。其家のさまは二階づくりにて、奥の間もありながら、軒端傾き壁崩れ、骨あらはにうちよろほひ、窓には蘿葛這ひまといひ、庭には葎生ひ茂り、板敷も朽ち簀子も破れ床の下より草生ひ出でなどしていぶせさは云はんかたなし。素より一錢の貯もなく、爲すべき活業もなければ童の翫物にするいろくの笛、牧童の横笛、盲法師の一節截、喇叭噴哨笙の笛の類ひさへ手細工につくりてこれを賣りありき、鹿笛に哀しき秋をおもひ、鶯笛に侘しき春をむかへ、わづかなる價を取りて母を養ひ子を育つれば、夜の衣薄くして曉の霜凌じく、朝氣の烟絶えんにて常に飢がちなり。素より孝心深きものなれば父十字兵衛が非命に死せしを今に悲しみ、烏邊野の葬所にしばく詣で、是を祭ること懇なり。母はいろくの辛苦の積りけるゆゑにや、顰となりて大聲に云ふことすら聞えず、餘兵衛はこれを歎き、ますく孝順に仕へて心を川うる事切なり、貧しきなかにも母には味よき食をすゝめ、おのれと子は飽食を食ふ

然るもなほ足らざる時はおのれは飢を忍びて食せざる日も多かるなり。されど母には食したる氣色を見せて、其心を安からしむ。川うべき錢ある時は、魚肉あるひは味よき餅菓子のだぐひを求めて母にすゝめ、其喜の色を見て樂しめり、子の窓太郎はいまだ五歳にてわきまへなければ、共にこれを食はめと云ひて泣くを、餘兵衛呵りこらして食はしめず、母の十分に食するを喜びぬ。己れは常に襤褸のみに着て臥し、母には衾を厚うして臥さしめ、なほ寒からん事を思ひて母の熟睡をうかいひ、おのれが一重を脱ぎてこれを蔽ふ。母睡を醒して餘兵衛が臥したる方を見やり、彼が薄着を悲しみ、我に着せたる彼襤褸を又餘兵衛におほひ、孫は己れ抱き、衾をおほく孫に着せておのれは寒さを厭はず、餘兵衛目醒れば又一重を母にゆづる。一夜のうちに、親子一重の襤褸をゆづりあふこと度々なり、母の慈と子の孝と大概かくの如し。是等はすべて此前の事ぞかし、かくて五月の半ばに至りけるが、餘兵衛益々困窮して、米屋薪屋、古手屋などに債おほくいでき、

彼輩夫を厳しくはたりければ、さまざまに詞をつくして云延べ、母に知らせまじと心をつかひぬ。餘兵衛熱々思ひけるは、頃日母の容體を見るに、瘦せかじけ日にまさりて衰へたまふ様子なり。我貧しき中にも母には折く魚肉をす、め、食の乏しからざる様に心をつけまらするに、漸々に衰へ給ふはいぶかしき事なり。試みずばあるがからずと思ひ、一日あざらけき魚を求めて手づから可憐に調理、新に飯を煮てかの魚肉を添え、母の前にそなへおき、拙者は物賣に出で候へば、ゆるやかにこれを召上り候へかといふことを、指をもて掌に書いて見せれば、母はいと喜べるさまにてうち點頭きぬ。餘兵衛は直ちに商ひに出づる體をなして立出で、家の傍なる竹林のうちに隠れ入りて、裏の様子を覗ひ居たり。母は斯くありとは露しらず、孫の窓太郎を側近くよせて云ふやう、いつもの如く汝此魚を食せよ、父の歸らざるうちに疾く〜と云ひつ、箸を把りて彼の魚の肉をむしり、咽に骨を立つるなといひて食はしめければ、窓太郎はいと嬉しげに舌打

して食ふ、眞弓は其けしきを見て胸ふさがりけるが、少時ありて涙の目をおさへあな不便や、餘兵衛我に孝なるゆゑ、いとをしき子の食を減じて我には食を飽しむ。故に汝は飢がちにて、僅の魚肉を食しむるも、餓鬼に百味の飲食を與へたらん様に喜べり。我争か是を獨食するに忍ぶべきや、若し父が歸りて問は、魚は此祖母が残らず食ひぬるといへ、必らず汝が食しといふべからずと云ひて皆窓太郎に食はしめ、おのれは一箸だに食す、荒屋は晝も豹嘯のおほきうるさ、よと云ひつ、團扇を把りて窓太郎をあふぎやりぬ。餘兵衛は壁の崩れたる所より暗に此體を見て落涙し、扱は母人孫を深く慈み給ひ、我まらす食を我家にあらざる時は皆窓太郎に與へ給ひ、自は飢を忍びて食し給はざるゆゑに、日にまさりて瘦衰へ給ふなるべしと思ひて、且つ驚き且つ歎きけるが、はやく黄昏の比となり雲の間より電光閃めきて、遠く雷の聲響き、やがて雨降り來べく思はれければ、やをら竹林の裏を出で、外の方より歸り來たる體をなして裏に入り、母の前に額

づきて、今日しも錢おほく得て歸り候、これを見給へといふを仕方にして見せつ、懐より錢の袋を把り出して見せければ、母は喜び、思ひしよりも歸の早かりしぞ、前程の魚何時よりもなほ美味にて、覺えず食を過ぐせしなり。我今日は何かにまぎれて未だ看經をせず、我はこれをすべければ、汝は暫く休息せよと云ひて、念珠を袖く、みにつまぐりつ、灯火を把りて奥の一間に入りにけり。餘兵衛は門首の戸を引きよせ、引窓の戸を立などして雨の降べき用意をなし、方灯を取出して、火打の石火雷光も壁の破れを漏る風に、硫黄の花を消されじと、心の闇の袖屏風、寝冷させじと子を思ふ、親の心をしらぬ子の、まろび寝したる窓太郎、食に飽てやすやくと、快けに睡りつく、餘兵衛は獨手を叉きて、心の裏におもひけるは、母人孫を慈くしみの切なるゆゑに、おん身の衰へを願給はず。かくて日を過し給は、餓死したまはん事必定なり、高祿を給はりし昔の身ならば如何程にも孝養を盡すべきに口惜しさよ、母人の心ゆくほどに窓太郎を養はん

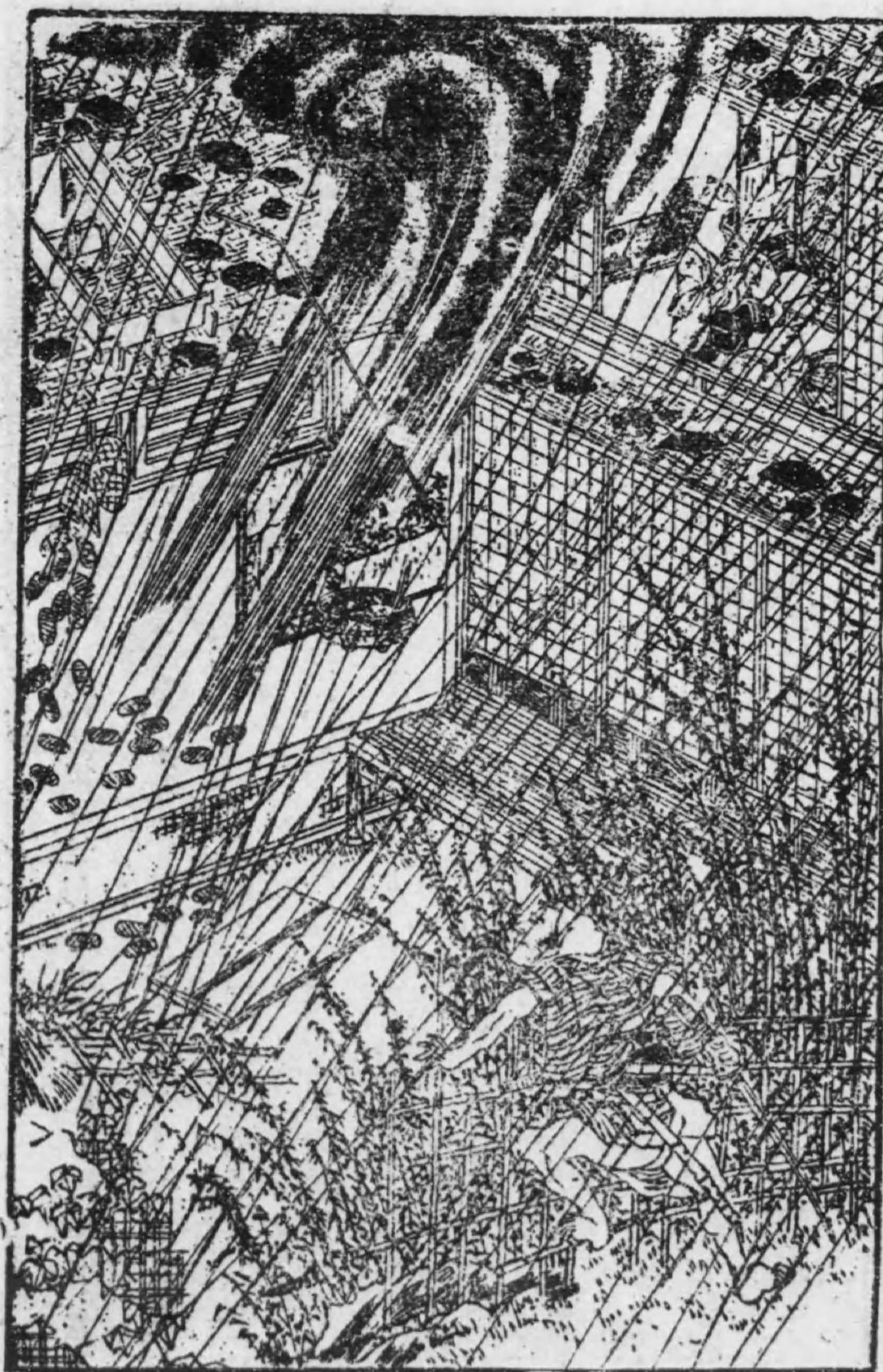
も、糧不足なれば詮術なし。唐土の孝子は親を養ふ其ために、子を埋めんとしたるもあり、我運命盡きす若し天日の光りを見ることありて再び妻妾を娶らば子は又も得らるべし。母は再び得る事能はざれば、寧ろ窓太郎を失ひて一口を減じ、且つ母の銀を去り絆を解くにしかじ。然れども子を捨つるは、世の制禁なればすべからず、今夜竊に刺殺し、母には他に預け遣せしとも云ひて當座を繕ふべしと心を定め、壁に掛けおきたる刀を把りて立向ひけるが、かくとは知らぬ窓太郎が寝顔の愛らしきに氣おくれし、餘りにいと惜くていづくに刀を立つべしとも覺えず、目もくれ心も消えはて、前後不覺に泣き伏しぬ。折しも奥には母真弓が看經の聲鉦の音も、細き火陰に焼捨し、蚊遣の烟も鳥部野の、むなしき空を見る端かと思ひつ、咽せかへりて、しばし歎きに沈みしが、さてしもあるべき事ならねばと思ひ直して、すでに刀を抜んとしたると、いかにしてか抜けざりけり。心づきてよく見れば、此刀を壁に掛けおきたる時、窓太郎が守を入れし巾着に、

迷子の札を括り付けたるを打懸けおきしが、其紐刀の鐔に纏ひつき、留となりて抜けざるなり。餘兵衛これをつらく見て、又氣を挫く時しもある、魍々と鳴神の響きも遙か遠里に、迷子をよぶ鉦太鼓、いと哀れを添えにけり。嗚呼人の親の心は闇も厭はずして、子を尋ぬる者もあり、宿世の悪き因果にて、貧しき身にはなりさがれど、子には怪我だにさせまじと、これ此ごとく守巾著つけさせしが親の手にかげ殺す子に、劍難除は何事ぞ、冥途に迷はず幼子に、迷子札も無益なり。幼くて死す者は罪科もあるまじと思へども、父母養育の之恩を、おくらで親に先立つゆゑ、不孝の罪の重しと聞く、定業すらさありといふ。況んや刃にかけられて、非業に死なば窓太郎、佐比河原に迷ひゆき、砂を集めて塔を積み、さぞな阿責に苦しまん。我は一生貧しくとも彼をばよく生立て、老後の力亡後は、親の棺を舁さめと思ひ思ふて育てし子を、我手にかけて身を屠り、いづれ流は順なる水をさかしまに、手向くべしと思ひきや、親子は一世の縁と聞けば、もう

來世でも逢れぬ我子、永劫顔の見おさめと、寢顔をつらく、打守り、恩愛深き悲みに、身を刻まる、思ひして、落す涙は五月雨の、笈にあまる如くなり。餘兵衛は元來丈夫にて、男魂失はざる者なれども、かく女々しき繰言いふは、子をおもふ心の切なるゆゑと、更に哀れ深かりけり。奥の間には母眞弓、聲の悲しさは此方の物音歎きもしらず、看經の鉦打おさめ、心の裏におもひけるは、餘兵衛錢袋に小石を入れ折し、我に見せて、我が心をやすからしむ。疾くよりこれを悟れども、さあらぬけしきにもてなすは、我又彼が心を安からしむべく思へばなり。彼がありさまを見るに、貧苦にいたみ瘦衰へて、年若けれども氣力なく、ほどほど命も危うけなり。しかのみならず孫までも、飢がちなれば、よく育つべうも覺えがたし。此母が身は年老ひて、残れる雪の日影待つ間の命なれば、何惜むべき我一口を減じ彼が絆を断ちて辛苦をはぶき、生さきある子や孫の命にかはり、冥途に到りて十字兵衛どの、死路を尋ね、露ばかりも苦患を救ひまらすにしくべ

からずと覺悟を極め、かねて亡後の經帷子にとおさめおきたる禪衣を取出し、剃刀ともに携へて、餘兵衛に知られじ曉られじと、拔足するも聲のおのが耳には聞えねど、外へはもる、簀子のうへ、折から降來る大雨の音にまぎれて忍びつ、彼方の二階に昇りゆきぬ。かゝる時しも笠の下に覆面し、蓑打着たる一個の武士此家に近く歩み來る、其跡より頬かぶりに面をかくしたる曲者、刀を抜きそばめて着き來り、こなたの武士を欺打にせんと思ふさまなるが、電光れば身を隠し、暗くなれば又あらはれ出て打んと覘ひ、隠れつ出でつ度々すれども、かの武士はこれを知らざる様子にて、いと危うくぞ見えにける。餘兵衛は泣沈みて居たりしが、母の看經の聲やみければ、見つけられては妨げと思ひつ、やがて心を取り直し、畢竟母の身替に殺す子なれば歎くべき事にあらずと思ひきり、恩愛の絆となりし守巾着の紐をひききり、刀をすらりと拔放して、ほどく刺殺さんとしたる時、蟲がしらすか窓太郎、あなやと怯えて目を醒し、起上りて泣出し、婆々さ

まはいづくに在す、婆々さまと寢々すべし、婆々さまのうと叫びつ、奥の方へゆかんとするを、心づよくも引戻し、思ひをさせじとおもふにぞ、泣きさげぶ子を引寄せつ、手拭執りて目口をふさぎ、引窓の繩たぐりよせて腰に結付け、放打にと思ひしが、猿者に捕はれし、猿の子繋ぎし如くにて、目もあてられぬ姿なり。あな可愛やそちが腰に結ひつけしは、菩提のために讀誦する經卷の紐とおもへ、南無阿彌陀佛と唱へつ、振上ぐる刀の下にまはる子の其姿は、北音旨に異ならざれば、平日の遊びをおもひ出して、鬼わたしの鬼よりも猶恐ろしき我仕業とおもへば又も刀の手さきたゆみけり。彼方の二階の暗裏には母眞弓、禪衣を身におほひ、口には念佛手には念珠、剃刀を把り上げて、吭を切らんとおし當てたり。此方の餘兵衛も思ひ切り、南無阿彌陀佛といふ聲もろとも、又振上ぐる刀の光り、あはやと閃めく電の、目を射るばかりに家内を照し、忽ち一聲霹靂、絹裂くごとくに鳴響きて、頭の上へ落ちるかと思ふばかりにきびしければ、餘兵衛が刀



の手の裏も覺えず狂ひて、窓太郎が身にはあたらす。腰に結びし窓の引繩すつばと切り、ぐはらくくと開く戸の、裏に降込む雨とともに、小判の山吹散亂して、井手の嵐とうたがへり。彼方の二階に覺悟の母も、雷鳴におどろきて、覺えず刃物を取落し、俯向にぞ伏したりける。此雷一團の火炎となりて、彼武士を打んと、覘ふ曲者の頭上に落ち、身體碎けて死してけり。餘兵衛是をば露しらず、小判の降りしを審りて仰ぎ見るに、引窓に這か、りたる葛葛に財布か、りて、其裏より亂れ落ちたる金なりけり。折しも人の訪ひして、さてもきびしき雷よ、必定此邊に落ちつらん、命拾ひをせし事よ、和主の臍は恙なきかと咬きつ、門の戸をひきあけてつと提灯をさし出せしは、米屋、薪屋、古手屋の輩なり。餘兵衛は拔身を背後にかくして忙はしくいひけるは、こは聞分なき人ぐよ、すでに昨日おん身等の許にゆき、此月の晦日までに云ひ延て置きつるに、夜中の遠慮もなきことかと恨みいへば此方は口をひとしうして、いなく我輩は貸をはたる爲に

は來ず、帳を消しに來つるなり。米薪古手の價のこらす受取此如しと、いひつ、矢立の筆把りて帳を消し、受取の書付をさし出せば、餘兵衛は益々いぶかしみ、此方より其價を償ひたる覺えもなきに受取しとはいかなる故ぞと訊ぬれば、三人の者云ひけるはさてはおん身はしらざるか、今朝奴僕と覺しき人我ぐが許に來り、南餘兵衛が債は如何程あるぞと問はる、故、帳を出して見せつれば、残らず拂ふて歸られたり。何にまれよき仕送りを持ちたるおん身、日來見下したる我も我を折りぬ。これより後は氣遣はず、いか程も貸しまるらせん、米薪は更にも云はず、古手なりと新らしき衣なりと、澤山買ふて給はれかし。幸ひに雨もやみぬ、傘の供してまかりなんと、慾に轉る宿鳥、翼すぼめて歸りけり。餘兵衛は頭を傾けて、彼といひ此といひ、返すくもいぶかしさよと、獨語ちたる時しもあれ、外の方に聲ありて、不審に思ふは理なり、こ、あけよ謂れを語りて聞かすべしと戸を開けさせて、彼の武士蓑笠脱ぎ捨て、覆面をかなぐりてしづくくと打通

る。餘兵衛此人を見るに是則ち主人山咲庄司雪森なれば、こはそもいかにと驚きつ、刀を歛めて禮をなし、席を拂ひて上坐に迎ゆれば、庄司は徐かに座をさだめ、且づ早く兒子が繩をと云ひけるにぞ、餘兵衛はいと面目なげに窓太郎が腰にのこりし繩を解き、目口におほひし手拭を取棄つれば、庄司は又財布をとらせ、亂れし金を集めさせ、灯火を取寄せて數をあらため財布を見て肩を擧め、いと不審なる體なりしが、彼僕の男沙土七を高手小手に括りあけて引立てつ、走來り、お旦那これにおはしますか、先刻八幡堤にて拙者におん渡しありし金財布を、此者が奪ひとらんと致せしゆゑ、奪はれじと争ふ折しも、黄昏の暗まぎれに、見せ物師等にや候はん、雷獸を入れたる圈を荷ひて來り候か刀の光にやおそれけん彼圈を捨置きて逃ゆきたる其後にて、彼獸雷氣にもよほされて、忽ち勢猛くなり圈を破りてをどり出で、狂ひめぐれる其はづみに、金財布の紐雷獸の首に掛り、其儘天上いたせしゆゑ、取戻さんにも翼はなし、詮術なさにせめて拙者が分説の

證にと、此者を捕へ頼かふりをかなぐりてよく見候へば、豈計んや、此者は是れ箕原蟻右衛門が僕沙土七に候ゆゑ、繩打ちて引立てまり候。金財布を失ひしは拙者が誤り、一言の分説も候はずと云ひて打萎れ、あやまり入りたる體なりけり。庄司はこれを聞くとひとしく、掌を撲的打ち其にて我不審はれぬ、夢平必らず愁ふるべからず。其財布は此にあり、金の數も五十兩一枚も不足なしといへば、夢平はこれを見て、一旦天上いたしたる其財布が如何にして此にあるやと審りぬ。庄司又夢平に向ひ、其沙土七には愈義多し、彼所の松に繋ぎおき、汝守りて逝けざるやうに心をつけよと云ひて遠ざけ、餘兵衛に向ひて云ひけるは、汝が父十字兵衛は、從來老實なる者にて、阿曾比などに心をうば、れ不義の金を費ひ捨つべき者にあらざるゆゑ、去る年自殺せし始末を疑はしく思ひ、我腹心の者を暗に都にのぼせ、五條坂に遣して様子を聞かせしに果して我推量にたがはず、兒子餘五郎、富士屋の吾妻といふ阿曾比のために祠堂金石塔料を遣ひ捨たる罪を十

字兵衛おのれが身に引受けて切腹し、我君より賜はりたる朝烏の刀をさへ賣代なして石塔料にしたる由、明白に知れたるなり。これによりて我餘五郎が行方を尋ね、手打にもすべく思ひぬれども、さある時は十字兵衛は大死になる道理なれば胸をさすりて捨おきぬ。これ少しも兒子を庇ふにあらず、唯十字兵衛が志を失ふに忍びざればなり。汝等母子をも速に歸參させ、原のごとく家を立てつかはしたく思ひぬれども、是れ又さある時は餘五郎が罪をあらはさざれば成りがたく、あらはす時は十字兵衛が心に違ふ。これを奈何ともすべからざれば、我心にもあらじ金を泥に捨て、玉を淵に沈めおきぬ。然るに此度君命を蒙り、箕腹蟻右衛門袴田紺九郎等兩人を捕へんために上京せしこそ幸ひなれば、此僕夢平に申しつけて汝が住家をたづねさせしに、貧しけなる様子と聞き、暗に汝を救はんため、先刻八幡堤にて、夢平に此財布の金五十兩を渡し、汝に與へよとまうしつけしに、今聞けば雷獸のために此金を失ひつるよし、落つる所も多かるべきに、此家のう

へに落ちたるは正しく是れ皇天汝が孝を憐れみ給ひて、新に此金を授け給ひしに疑ひなし。孝人に至る則は衆福來ると云へるはかゝる類ひなるべし。今朝米屋古手屋の者等に、汝が債を償はせしは、我夢平にまうしつけて爲せけるなり。母を養はん爲に子を殺さんと思ひつめたる汝が孝心、感ずるにあまりあり。皇天の憐み給ふも理なり、此金をもつて心の儘に母を養ひ、汝が心を安くすべしといひて彼の五十兩を財布におさめて與へたれば、餘兵衛は是をおし戴き、さては亡父は忠義のために死し候かといひて喜びつ、主人庄司の慈悲深き志を感歎して、落涙袖を絞りけり。時に隔ての障子を開きて、母眞弓るざり出で、庄司に向ひて恭しく禮をおこなひて云ひけるは、久々に健におはす御容體を拜し喜びにたへ侍らず。夫十字兵衛不忠をなして自殺いたし候と、今までも恨み居り候に、今彼處にておん物語を承はり候へば、しかにはあらぬ忠死のよし、さありてこそと喜ばしく思ひはんべり。我々をおん憐ふかく、債を償ひたまはるのみならず

許多の金を賜はる事、何をもてか此大恩に報ひ候べきと云ひて、頻りに涙を落し
 げれば、餘兵衛は驚き、母人は耳が聞え候かといふにぞ、母も心づきて、けにも
 けにもと云ひてうち驚き、今は何をかつ、むべき、我汝が貧窮を見るに忍びず、
 一口を減じて貧苦を救はんとおもひ、二階に昇りて自害せんとしたるに、今の雷
 鳴心の臓を貫くやうに覺えしが、さては雷の響に病根を打破りて我聲の直りしか
 と云ひて、我身ながら不思議に思へば、餘兵衛は聞きて益々おどろき、そは危か
 りし事よ、拙者も又母人の爲に窓太郎を殺して一口を減じ候はんと存じ、既に打
 たんと振上げたる刀の手の裏、雷鳴ゆゑに自然と狂ひ、打損じ候と云へば、母又
 云へるは、經帷子と思ひて着たる順禮の禪子には、觀音の御影もあり、今の雷鳴
 我が自害をとめ、汝が刀を狂はせしも、雲雷鼓掣電、刀尋段々壞の經文に違は
 ず、日來信する菩薩の擁護に疑ひなしと云ひて只管歎喜してけり。窓太郎がわき
 まへなく、眞弓が側に立寄りて、祖母さま睡たい、ねかしてよと膝に上りて抱き

つけば、やよ窓太郎、御主人さまのおん側なるぞ、お禮をせぬか不禮な奴と、口
 には呵れど心には、此祖母ゆゑに父の手にかゝらんとせし危さよ、不便の孫やと
 思ひつ、抱きしめて、とかく涙は止まらず。時に又夢平忙はしく來りていはく、
 沙土七めは、仰せの通り、彼處の松に繋ぎおき候が、此處の竹林ぎはに雷死とお
 ぼしき死骸あり、よくく見候へば、仄かに見知りたる者のやうに覺え候といふ。
 庄司はこれを聞くとひとしくすと立上り、餘兵衛に灯火を把らして、外の方に
 出來り、かの死骸を點檢するに、身體くだけ焼爛れたりと雖も、袴田紺八郎に疑
 ひなし。さては我が後をつけ來り、欺打にせんとしたるを、今の雷に打たれて死
 したるならん。惶るべしと云ひつ、舊のところを歸りて座し、又餘兵衛母子
 に對ひていはく、汝等兩人母は慈悲あり子は孝あり、今の迅雷母の自害を止め、
 子の刀の手を狂はしめて、孫の命を救ひ給ふ都て是れ天の憐みを蒙りし所なり。
 其に替りて紺九郎が雷に打れて死したるは、彼が不忠を天の罰し給ふ所に疑ひな

し彼といひ、是といひ、天の賞罰正きことかくの如し。善惡報應、因果觀面の天理、彰々として毫釐も違はざるを見よ、孝の天を感せしめたる例あけて計ふべからず、悪人の雷死せし例も又鮮からず、家貧して孝子顯はる世亂て忠臣を識るといふ。王良が言宜哉。汝我祿を受けたる昔の身ならば、其孝もあらはれまじと云ひて感嘆轉やまさりしが、又いはく、我汝をはやく歸參させたく思へども、一旦追拂ひたる者なれば、私の計ひに成りがたし。是れ我が苦しき所なり、何とぞニツの功を立てよ、其功といふは此如し斯様なりと、餘兵衛が耳につきて何事か囁きければ、餘兵衛は點頭きつ、かしこみ承はり候と答へけり。かくて庄司は別を告げて門外に立出でたる時、雨過ぎ雲散りて一輪の明月皎々と輝き、恰も白日の如くなり。此折しも餘五郎吾妻と共に此家を尋ね來り、餘五郎且つ父庄司にむかひ禮を行ひていはく、我不忠不孝にして、尊顔を拜すさへ面目なし。分説は切腹より外なしと存せしかど、十字兵衛が賣代なせし朝烏の刀を買戻し、これな

る餘兵衛に返し與へて、彼が家を立つる便にもと思ふばかりに、今まで永らへ候なり。しかるに此吾妻、鮎尾賀堂左衛門と云ふ者を欺き、かの刀を取りもどし候て爰にあり。我吾妻が心をしらす、僞狂人となりて堂左衛門が行方を尋ね候に、先刻圖らず途中にて吾妻に行きあひ、彼が本心を聞き、且つ露助にもあひ、堂左衛門が善心になりて切腹したる事、及び兄餘字兵衛どの拙者を憐みたまふ事を委しく聞き候へば、いよく罪おもき者は拙者なり。露助と申すは即ち僕路平がごとくに候。いざく餘兵衛これを受取れと云ひて、朝烏の刀に十字兵衛が位牌を添えて渡しければ、餘兵衛はこれを押戴きておさめけり。餘五郎又父に向ひ、十字兵衛が遺し置き候此竹の刀にて唯今切腹仕るが、せめて拙者が分説に候なり。いざ餘兵衛介錯頼むと云ひも果す、竹刀を抜放して腹に突立てんとしたりければ餘兵衛は慌ておし止む。吾妻も其手に取付きて涙を落し、いひ分なきはおん身ばかりか、十字兵衛どのを失ひし、其原を尋ねれば、妾が身より事おこれば、餘兵

衛どの親子の衆に合はすべき顔なし。殊更前ほど途中にて露助が語るを聞けば、堂左衛門は妾が同胞の兄なるよし、彼といひ是とまうし、妾こそ死なねばならず皆さま暇たび候へと云ひつ、竹刀を挿取りて、おのれが吮につき立てんとするを餘五郎またおし止め、いなく、我から先へ死ねはならずと云ひて、互ひに止めつ止められつ死を争ひしが、庄司は態と聲あら、かに二人を呵り、彼の竹刀を取りあけて、餘五郎が目先にさしつけ、これは是を見よ、

拙者此度の切腹犬死はおぬあやう極
浄短気沸騰れされ一と下い

かくの如くしるしたるは、十字兵衛、汝が性質をよく知りて、死したる後まで諫言を加へんと、忠義の魂を籠残したる書置にあらざるやと云ひさして、ひそかに

落涙したりけるが、又云ひけるは、憎しと思ふ汝なれども、是まで其儘さしおきしは、十字兵衛がかばかり切なる志を失ふまじと思へばなり。しかるに汝今自殺する則は、此書置の如く十字兵衛は犬死なり。しかのみならず昨夜淀瀬我旅宿を尋ね來りて物語るを聞けば、兄餘字兵衛汝を家督にしたき願ひにて既に刺髪したるよし、さある時は猶更に、汝死しては餘字兵衛が志に悖るのみならず、家相續を斷つ理なり。若し又強ひて死んとならば、七生までの勘當なるぞ、吾妻事は同家中背元澁右衛門の養女にて、原孝の爲に身を賣りたるよしなれば、餘五郎とは格別なり。汝も今死しては始の孝を失ひて、却て養父に不孝となる。これを能くくわきまへよ、餘五郎汝今死なんとおもふ一命を保ち、志をあらためて一功を立てよ、其功を立つる仔細は具さに餘兵衛に云ひ含めおきつれば、彼と心を合せて互ひに功を立てよ、しかる時は十字兵衛も冥途におきて喜ぶべし。二功立ちたる其時は歸參をさせ、改めて吾妻を妻女に致すべし、いかにくと云ひ

ければ、眞弓餘兵衛等も傍より言葉をそえて自殺を止めけるにぞ、餘五郎も吾妻も死ぬに死なれぬ義理となり、兩人共にさし俯向きて詞なし。庄司又餘兵衛に向ひ、十字兵衛一旦餘五郎が爲に賣代なしたる其朝烏の刀、再び汝が手に戻りしも反哺の孝なる汝が徳の天に通ぜし故なるべし、かへすくも譽なり。汝笛を造ることをよくする由、號笛といふは俗にいふ呼子笛なり。これ軍器の一つなれども尋常の呼子笛は深山幽谷の濕地に於いてこれを吹けばよく音を出さず、汝が工夫をもつて濕地といへどもよく音を出す呼子笛をつくるべし、後日かならず川うる時あらんといふ。かゝる時しも傍邊の竹林をおし分けて、箕腹蟻右衛門あらはれ出で、ものをも云はで刀を抜きて庄司を目がけ唯一打と斬りつけたり。庄司は速く身を捻り、早足を飛して地上に踢仆し、のけさまに倒れたるを足下に踏付け、やをれ欺打とは卑怯至極、我君命を蒙り汝と紺九郎が行方を尋ねるため上京せしに、兩人とも自ら來りて身を失ふ。皆是れ天罰の然らしむるところなり、汝紺九

郎と心を合せ、月影ヶ谷梅ヶ谷の兩家を亡さんと隠謀を企てたること、密書によりて分明なり。殊更汝餘五郎をすゝめて遊里に誘ひしより事起りて、十字兵衛自殺したれば、十字兵衛がためにも讐敵なり。彼が魂を籠め残したる此竹刀は竹鎗同然、主君を弑し奉らんと事をたくみし大罪人を戮するには幸ひの刑具なり。不忠の執を思ひしれと呼はりつゝ、力を極めて竹刀を吮に貫きければ、蟻右衛門は一聲叫び手足をもがき苦しむ體、側に見る目は心地よくこそ思はれけれ。かくて庄司竹刀を引抜きければ、蟻右衛門は息絶えたり。餘兵衛は心得手拭を取りて刀の血を清むれば、庄司は刀を鞘におさめ、やよ餘五郎、此竹刀は汝が一生の守となして、短慮功をなさずといふ常言を忘るゝなと云ひて與へければ、餘五郎は押戴きてぞ帶たりける。庄司又いひけるは、時刻移れば、我は旅宿に歸るべし、餘兵衛汝は此蟻右衛門と紺九郎が首を打ち、あとより旅宿に持參せよ、沙土七は彼等兩人が隠惡の證人なれば、生捕の儘鎌倉に率て歸らん、夢平は其繩つきを引立

て、我供せよと命じつ、立出づれば、餘五郎、吾妻、眞弓、餘兵衛もろともに門送りして、庄司が背後を伏拜み、感激の涙に袖をぞしぼりける。

○かくて庄司は、蟻右衛門紺九郎が首級を携へ、妻淀瀬は堂左衛門が首級を携へ、夢平に沙土七を率せて鎌倉に歸り、主君判官の面前に出でて、庄司且づかの兩人の首級を實檢にそなふ。淀瀬は堂左衛門が首級を出して軍川金の賊なることを告げ、且つ餘字兵衛が都を殺せし謂を委しく聞えあぐれば、判官は其志を感賞あり。紺九郎を打取りたる事を梅ヶ谷に傳へ、沙土七を誅戮す。是等の事を委しく云はんはくだくしければ、唯大略をしるすのみ、庄司が餘五郎南餘兵衛等二人の者に功を立てよと云へるは、何等の功にや、後々の巻を讀得てしらん。

十三 きられたる夢はまことか茂林の闇打

夫は扱おき爰に又、一段の事の端を惹出せり。是いかなる事ぞなれば、月影ヶ谷判

官の息女、今年十五歳に至り給ふが、頃日病の床に臥し給ひ、一切ものも召さゞりければ、祿をたまはる醫師は更なり、世にすぐれたる良醫を召して治術を盡させ給ふと雖も、露ばかりも驗なく漸勞れ給ひ、面瘦せ身細りて日に異に重くなりまさり給ふにぞ、父母の君は更なり傳の人々も愁ひ悲しむことかぎりなく、病み給ふおん容體疑ふらくば物怪の所爲にはあらずや。若ししからば如何なる良薬も驗あるべからず、此上は兎角神佛の冥助を願ふに如くべからずとて、有驗の高僧に悃祈を盡させ、諸社に幣帛を奉りて丹精をこらし給ひ、母君は侍女等を代るく鶴が岡の御社に日参させ給ひけるが、一日一個の侍女かの御社に参詣して祈念をはりて下向の折ふし、庭きよめの宮奴等、瑞籬の下に集ひて物語するを聞けば、巨福路坂に太麻の靨女といふあり。寄絃口寄の上手にて、佛教にも通達し、難病奇疾物怪の祟など、其原因をあきらむる事鏡に物の影をうつすが如く、實に活る神佛とも云ひつべしと噂するを、彼の侍女聞きつけて、これは此社のおほん神辻

占に託して告げ給ふならめと喜びつ、道を急ぎて館に歸り、おん母君に斯様と聞えければ、母君もいと喜び給ひて判官に告げきこえ、其靦女とく呼迎へよと抑せて巨福路坂へ使を立て給ひけるに、太麻の靦女召に應じてやがて館に参りければ、姫の病架に近く呼入れ給ひ、判官夫婦對面ありて後、寄絛を乞ひ給ふにぞ、靦女つ、しみて且つ神保を稱へ、梓の弓を打鳴らして冥道を驚かし、目を閉ぢて無心になりけるに、あな思ひよらずや、去んぬる延文四年信濃國管形にて亡たる、相模次郎時行の怨靈梓の弓にひかれ出て靦女につき、判官に對して云ひけるは、我南朝の勅免をかうむりて蟄懷の旗を飄へし、北朝を傾けて累年の憤積を晴さばやと思ひ立ちぬる甲斐もなく、運命つたなくして汝が爲に亡され、股肱耳目と頼みつる、大佛九郎貞直さへ知具麻川に入水して、底の水屑と成り果てぬれば、生残りたる味方の者も、忽ち心變して皆足利に降参し、今は我輩の亡跡をとふ者だになければ、無縁の鬼となり修羅の眷屬と成りて噴毒を含む心止む時

なく、永劫惡趣を免かる、事あたはざれば、其恨を散ぜんため、當家に祟をなし先づ汝が娘を取殺して無間地獄にいざなひ去き、共に呵責をうけしめ、おひく、汝等をも取殺して、遂に當家を絶やすべく思ふなり。疾くよりしか思ひぬれども管形落城の刻汝が手に入りたる日月のおん旗當家に祕めありしゆゑ、是に恐れて近づく事あたはず、むなしく年月を過せしが、近比かのおん旗を鶴ヶ岡の神庫に藏めしゆゑに、時を得て祟をなすことを得たり。見よく娘は更なり、汝等夫婦嫡子玉兔之助を始め一族郎等に至るまで、皆取殺し、無間地獄に墮して怨を晴らさんずるぞといふ。其姿は見えずと雖も、怒れる聲は其人に向ひて聞くが如くにて、怖ろしなども云ふべからず。母君を始め此座にありし人々これを聞きて大に驚きけるが、判官は半かば信じ、半ばは疑ひつ、靦女に向ひ怨靈の仔細を云ひて詰問ひ給へば、靦女はこれを聞き、妾先づ試むべき事ありとて洗米を取りよせ、梓の弓を載する小櫃めきたる物の上に蒔散して、みづから姫の枕上に持行



き、此洗米を手づから拾取りて召し給へといふ。姫は侍女等に扶け起されてかの器にむかひ、洗米をつまみ取りて喰はんとし給ひけるに、あな怪し彼米粒忽ち蛭に化して蠢きければ、姫はこれを見て打わな、き、あなやと叫びて伏し給へば、母君を始めかしづきの侍女等も、身の毛そばたちて恐れあひぬ。さて姫を介抱して薬などまゐらせけるに、漸く蘇生ることを得給へり。時に靨女云ひけるは、怨靈姫を無間地獄に誘はんといへる言違ふべからず、其故は無間地獄に墮つる者は此世にあるうちより食物蛭に化して食すること能はずといへり。今現に此しるしあり疑ふべからず、つやく物を召さるも理なりといふ。判官は眼前にかゝる奇怪を見給ひて疑ひを決し、此怨靈を静めんにはいかにして宜らめとかさねて問ひ給へば、靨女いはく、怨靈日月のおん旗を恐るとなれば、これを暫く借受け給ひて、姫の病架に立て置き、僧衆を請じて大般若經を讀ましめ給は、惡靈得脱して退き、姫必らず快驗あるべし。其故は帝釋と修羅と須彌の中央にて合戦をい

たす時、帝釋軍に勝ちては修羅小身を現して藕絲の孔の裏に隠れ、修羅又勝つ時は須彌の頂に坐して、手に日月を握り足に大海を踏むといへり。時行の靈修羅の眷屬になりしとなれば、日月のお旗をおそる、は、王威を恐る、のみならず、此理にもよるべきなり。しかのみならず修羅三十三天の上に責め上りて、帝釋の居所を追落し、慾界の衆生を悉く我有になさんとする時、諸天善神善法堂に集り給ひて般若經を講じ給ふ。此時虚空より輪寶下りて劍戟を雨し、修羅の輩をす々に割切るといへり。されば時行の靈を静め給はんには、般若真讀の功力に如くべからずといへば、判官はこれを感じ給ひ、傍の人に仰せて謝物をとらせ給へば靨女は恭しくこれを受納めて暇を乞ひ、私宅にぞ歸りける。かくて判官は俄に青元澁右衛門を召し呼び給ひ、先達て鶴ヶ岡に奉納せし日月の旗を暫く借受け來るべしと仰せければ、澁右衛門はこれをうけ給り、急ぎ鶴ヶ岡に參詣し、先づ幣帛を進め、神樂を奏して神慮を慰し、神司に告げて彼の御旗を借受け、みづからは是

を携へて歸路に臨む時、はやく夜闌にぞ至りける。此夜は雨雲月をかくしていと暗かりけるが、澁右衛門は許多の供人に前後を守らして極樂寺の切通しを過ぎける時、茂林の裏より黒き装束したる曲者兩人あらはれ出で、前後の提灯を斬落し刀を電光の如くに閃めかすれば、供人等は臆して直ちに逃去くもあり、刀を抜きて戦ふもありしが、防ぎかねて皆散々に逃け去りぬ。澁右衛門は懐の御旗を大事と守護すれば、戦を好まずと雖も、彼曲者等順風の落葉急水の游魚の如くに走りかゝりて、鉦をそろへて斬りつくれば、止むことを得ず抜合せて打合ひぬ。其刃音は梢をならす松風に響きあひて、いと物凄き林木原あたりに近き禪院の、鉦鼓の音のひまゝに、鳴きまじる宿鳥の聲も、更けわたる夜の暗がりには、刃先もしどろの探り打ち、刀の光り息づかひを心あてに戦へば、或は石の地藏に斬りつけて火花を散し、或は同士打をして血煙を立て、しばらく時をぞ移しける。澁右衛門は曾て劍法に達しければ、規ひよりてはしと、打ち、身を換しては丁と斬り、

二人の曲者にあまた手を追せけるにぞ、曲者等は敵し難くや思ひけん、早足を出して逃去きぬ。此時やうく雲晴れ月あらはれて明かなり。澁右衛門は彼等を打洩したるを口惜く思ひつ、一息つきたる折しもあれ、茂林の裏に弦音高く漂とひゞき、一筋の箭飛び來りて、澁右衛門が胸さかを篋深に射たれば、さしも強氣の澁右衛門も堪りかね一聲呀と叫びて後に撞と打倒れ、箭疵の鮮血懐に流れ入りて御旗を汚しければ、御旗は急ち懐を放出でて空中に閃きぬ。かゝる時しも茂林の裏より、兜頭巾に錦の野袴、金拵への腰刀のきらめくを帯びたる曲者、二所篠の弓を携へて歩出で、空中にひらめく御旗を手早く把りて懐に押入れつ、莞爾と笑ふ不敵のありさま、唯者とは見えざりけり。時に澁右衛門は息吹返して刀を杖に起上り、懐をさぐり見て御旗のなきに仰天しがつくり弱りて又倒れぬ。曲者は點首きつ、澁右衛門をのけさまに踢かへして、彼が刀を拾ひ取り、止め刃一ゑぐり、老鷹の音を止めて、衣脱ぐ蛇の昇天を、望むきざしの其骨柄、折か

ら撞き出す三更の、鐘の響きと諸共に、行方もしれずなりにけり。楮此邊の里人等、澁右衛門が死骸を見つけて騒ぎ立ち、直ちに月影ヶ谷の館に註進しければ、山咲庄司雪森點檢の役目をかうむり、僕夢平に提灯もたせて此所に來り、澁右衛門が不慮の横死を悲しみつ、胸に立ちたる箭を抜取り、箭の根を見て審り居たる所に、早く人の告げけるにや、澁右衛門が妻於破矢兒子動之助と共に夢路を辿るこ、ちして走り來つ、空しき骸に取りつきて、前後不覺に號哭び現心もなかりけり。庄司も共に落涙し、和主等の愁傷さぞあらん。あたは有爲の武士を、惜むべし悲むべしといひて、暫し歎きに沈みしが、や、ありていひらくは、餘の物に心をかけず、御旗ばかりを奪ひ去きたる曲者は、なみの盜賊ならず。察する所南朝に心をよする輩ならんといひければ、動之助涙をばらひ、君父の讐には共に天を戴かずと承れば、はやく敵の行方を尋ね、おん旗を取返し、首取りて亡父の靈に手向けたく候へば、此由を主君に聞え上給ひて、復讐をおん免し給はるやう

におんとりなし下されかすと、母諸共に願ひければ、庄司いはく、父母の讐に居ること、苦に寢干を枕とし不仕といふ語もあれば、其願ひ尤もなり。早速主君に聞えあけておん暇を賜はるやうにとりなすべし、去りながら敵はなみくの者にはあるまじければ、必らずかろく思ふことなかれ、勇み立つ若鷹は、却りて過つこと多きぞかし。儉起鳥に心をつけ、力草を放つことなかれ、自らよくこれを思量せよと細やかに教訓すれば、其おん詞こそ我爲の鎧、腹巻、撃手、脇楯、忠といふ字を兜となし、孝といふ字を鞍となし、たとひ敵鐵城に籠り石門に隠る、とも、一念の誠をもつて尋ね出し、首ひつ提て立歸らんと、勢ひ籠て云ひけるにぞ、母は喜び庄司も嬉しみ、いさましく、必らず其猛き心をたゆまずなと云ひつ、夢平を願て睨眼すれば、夢平は其意を悟り、一腰を拔手も見せず、動之助に斬りつくれば、心得たりと四寸のひらき、下をはらへばひらりと飛びて腕首つかみ「コリヤ夢平、何するぞ。「イヤサ、若し敵がまつかうせば、「斯うおさへて」と

ころを開いて斯う斬りかけなば、まづ此やうにと扇のあしらひ、夢平が刀をはつ
 しと打落せば、庄司は空虚を見すまして、かの矢の根を抜取りつ、手裏劍にう
 ちつければ、かえ草履にて丁とうけ止め。此手の裏では復讐の御願はかなふまじ
 や。オ、天晴見事の其矢の根こそ敵を探る手が、りなれ、それを證據にたづぬべ
 し。親父の死骸は勝手次第にとりおかれよ。我は一刻もはやく館に歸りて、復讐
 の願ひを出し遣はすべしといひ残し、夢平を具して立歸れば、母の於破矢も雪
 森が深き情を感歎し、動之助と諸共に空しき骸を抱足せば、疵口より激る血のに
 ほひ鼻を襲ひて腥さき身内は冷えて色變り、諸行無常の青嵐に、溢れて脆き蔦の
 花、寂滅爲樂の短夜に、碎けて消えし苔の露、目もあてられぬありさまなれば、
 又も歎きに沈みしが、森の鳥飛びわたりて鳴く聲し、曉近くぞなりにける。嗚呼
 此溢右衛門初め駕籠の塵兵衛と云ひし時は、貧苦にたへず、後に祿を賜りて漸く
 心を安んずといへども、今又此災にかゝりて非命に死す、正しく是れ父五大院

左衛門宗繁が臯惡其子に報ふ所なるべし。常言に一分の悪をなせば、十分の悪報
 ありと云へるも宜なり、豈怖れざらんや。

卷之六

十四 蟋蟀枕も床も野宿の妖怪

去程に背元動之助は復讐の願叶ひて、俄に行装を整へ吉日を選び、一僕も具せず唯獨り、みづから包を背負ひ鎌倉を發足し、おもふ旨やありけん武者修行と云ひなし、越中國をこゝろざして出過ぎぬ。倭越中國、立山の連山に蛭牙山といふ廣大なる山あり、根は地角に盤り、頂は天心に接り、遠く觀れば雲痕を磨斷し、近く看れば月魄を平呑し、深嶺幽谷の裏常に雲霧を籠めて晴る、時なし。山口には鳥獸おほく栖むゆるに、獠者等も多しと雖も、半山より奥は人跡斷えて其奥を極め、知る者なかりけり。比しも秋の初めつかた、廻國の修行者とおぼしく、笈を負ひ錫杖をつき、鉦を打ならしてかの蛭牙山の半山にのぼり、行暮れて宿すべき所なければ、野宿すべきかいかにせんと思ひわづらひつゝ、彼方此方を見渡す

に、遙か向ふの茂林の裏に、一つの社見えければ大さによろこび、草の傾くばかりの徑路をもとめ、萩紫苑女郎花のたぐひの草どもいと高く生のびて、露滋き裏をおし分けつ、其處に去きて見るに、あはれにさみしう荒れ惑ひて、人も住ざる古社なり。笈をおろして裏に入り、こまやかに見ると、神前と覺しき處は奥深くしていと暗く、蝙蝠など飛さわぎ、祭祀の具も見えず、いかなる神にかわきまへがたし。軒端傾き朽目に苔蒸して垣衣生茂り、月も時雨も漏るべきさまなり。葎には崩れて鳥の巢をいとなむ處となり、翠簾は破れて蜘蛛の糸を結ぶ便となれり。床には落葉敷きかさね、塵うづ高くつもりて獸の足跡多し。高欄瑞籬みな朽ちて棘の裏に倒れたり。めぐりには幾年をふるともしれぬ松杉のたぐひ深く立籠め、枝葉茂りて社の上に打蔽ひ、物凄じさ云はんかたなし。修行者は野宿するには増しならめと思ひつゝ、社の片隅に笈を置き、油紙帳を取出して敷物とし、しばらく休息しけるが、松吹く風谷の水音耳近く響くひまゝに聞こゆる泉の聲のかねが

れなるいろ／＼に鳴く蟲の音の哀れなる、淒涼寂寞として人めづらしげに、豹脚
 さへ身うちを螫にぞ、目もあはねば睡りもつかず、暫くありて向ふ方を遙かに
 見やれば、毬ぼどなる火の光六つ七つ亂れ飛ぶ。狐のともす火かとおもふに漸々
 に近くなるを見れば、百姓と覺しき者大勢松明を前に照らし注連をはりたる棺を
 昇き、幣帛を持ち、此社をのぞみて進み來つ、ものいふを聞けば「嗚呼村一番のう
 つくしき此娘、人身御供になるといふはかはゆい事」おいのう、年は八つ、親の
 歎きはいかばかり何がうまうておん神は、おさない娘を食ひ給ふぞ、悲しき目を
 見る事よと、餘所の哀れを謔きつ、社の前に棺をする、其上に幣帛をさし挟み
 皆々ひれふし額づきつ、おん神に告げ奉る。おん望の籠を斯様に供じ奉れば
 田畑を荒したまはぬ様にねぎ奉ると、いふ間も身の毛そばたちて「や、腥き風が
 吹く、松明を吹消されな、そ、や風がと云ひさして胸をひやし、魂を消やして打
 ちわな、き、我先にと争ひて、こけつ轉びつ逃げ歸る。修行者は社の隅に身をひ

そめて此様子を見聞し、さては此社に變化棲みて幼き者をとると覺ゆ。我幸ひに
 此に宿す變化を退治して、諸人の歎きを救はゞやと思ひつ、錫杖に仕込みたる
 刀を抜きかけてなほ覗ひてぞ居たりける。漸時うつり、夜嵐はけしう吹わたりて
 颼と梢をならし、青葉を吹落しいと物凄き時しもあれ、奥深き神前俄に鳴動し
 て足音ひし／＼と響き、翠簾をかなぐる音などして、現はれ出たる變化の姿、白
 き薄衣のやうなる物を頭にかづきて、正體は知れざれども、かの棺の傍近く歩み
 より、銀の鞍を打曲けたるやうなる爪生、鐵の針を植並みたるやうなる毛生たる
 手をさしのべて、棺の蓋をめぐりと爬破りけるが、不思議や棺の裏よりも手を
 出して、變化の手首をしかと掴み、忽棺を踏破りて、前髪ある若者旅装束にて
 包を負ひ、白羽の矢を握りてあらはれ出たり、是れ則ち別人にあらず鬻元動之助
 氏邦なり。變化は手を振拂ひ、動之助を掴み殺ん勢ひなり。修行者は變化を目が
 け、錫杖に仕込みたる刀を抜きて唯一打と斬りつくる。變化は早く身をかはし、

頭をのぞめば身を沈め、下を拂へば飛上る、動之助は生捕ばやと思ひけるにや、空虚をうかひ變化の腰に組みつきぬ。變化は背後に手をまはし、動之助が襟首つかみ、引退けんとしたる所を、修行者が呀と聲かけて打こむ刀、變化の腕を斬落せば、動之助はさつと退く、其間に變化は摺り抜けてかき消すやうに失せたりけり。修行者は暗裏に動之助を變化と思ひ、又斬りつくれば飛すさりて抜合せ、丁こしと、斬合ひしが、雨雲の絶間よりもれいづる月のさやけさに、互ひに顔を見合せて、「和主は、「おん身は、「こははからず、「思ひかけずと互ひに驚き刀をひきて鞘に斂め、先づ修行者云ひけるは、和主は何故に棺に入りて此處には來つるぞと問ひければ、動之助云ひけるは、其不審は理なり。我亡父の仇を尋ぬるため、武者修行と云ひなして常國に到り、昨夜此山の麓の村長の家に宿をかりんと云ひ入れしに、主人夫婦をはじめ家内の者、都て歎き悲しみ居たるゆゑ、何事を愁ふるぞと訊ねしに、近頃此蛭牙山の木枯の森の古社に邪神棲みて、月毎に一人づ、

幼き女を人身御供にとる事あり。これを供ぜざれば村々の田畑をあらし、許多の人の難儀になるゆゑ止ことを得ず、いとしき子をとらる、者數しれず、其とらんと思ふ子のある家には軒端に白羽の矢の立つ事あり、是れ其しるしなり。我家にも其矢立ちしゆゑに、今年八つになる娘を人身御供に供ふるなり、其故にかく歎くなりといふ。其矢は則ち我携へたる此矢なり。我夫を聞き疑ふ處多ければ、其主人に斯うくせよと云ひ含め、我其娘に代りて此棺の裏に入り、百姓等には娘と思はせ、此處に昇れ來つるが、果して推量に違はず、今おん身の斬り落したる變化の腕をよく見給へといふにぞ、修行者かの腕を取りて月の光によく見れば、是れ眞の腕にあらず、手覆なす物に怪しき物の爪おそろき物の毛をうゑてつくりたる物なりけり。修行者はこれを見、又かの矢を見、さては眞の變化にあらず、曲者の所爲に疑ひなし。打漏らせしこそ残念なれといへば、動之助いはく如何にもさなり、なみくの曲者とはおもはれずかうくならんと耳語ば、修行

者も何にかあらん耳語ぬ。動之助は打うなづき、路上の説話草裡人ありといへば、かゝる山中と雖も容易に密事は語りがたし。拙者は此山奥に分登りて様子を試み候らはん、しからば互ひに立別れ、再會の時は斯様とと修行者又耳語つ、枯木の枝を拾ひ集めて松明につくれば、動之助は火燧袋を取出し、火を打出して松明に燃し、兩人これを分ち取り、互ひに思ふ旨やありけん、動之助は山奥の方、修行者は麓の方、別々に出ゆきぬ。かくて動之助は松明をふり照し、木の下の露に袖ぬれて、山深く上りゆくに、徑路盤曲し類ひまれなる險阻なり。人跡絶えたる深山なれば、梢をつたふ山猿、岩間にすたく鵲鼠も、人を侮る風情なり。狼の吼ゆる聲は山響に響きて凄まじく聞ゆ。山蛭は肉に喰入りて鮮血を吸ひ痛に堪へざれば、蛭牙山と名づくるも宜也とおもひつ、危けなる阻をつたひ、苔滑らなる岳橋を渡りなどしてゆくに、峯越の風に松明を吹消されければ、岩根はひ出たる所に尻かけてやすらひ居たるに、松林の裏よりあらしくしき大男二人歩み出

て、動之助に向ひ雷の落ちかゝるばかりの聲して、いはく汝は前髪ある弱輩なるが、何等の爲に夜中獨り此山に上るや。此山の半より上は人の上るべき處にあらざるに、見けかに似ず膽ふとき奴かなといふ。動之助此者等を見るに身材高く、眼は狼のごとく、鼻は野猪の如く、髭は熊のごとくなるが、峯葉をもて編みたる頭巾をかぶり、蒲撃手をかけ、岳管の脛巾をゆひ、山刀の長きを帯び、一人は矛をよこたへ、一人は鎌を提けたり。なみくの者ならば打驚くべきに、動之助は臆したるけしきも見せず、かゝる山中を夜に入りて獨上ること、心得なくてなるべきか。汝等もし妨せば、我手並を見すべきぞといふ。かの者等は阿々とうち笑ひ、いよく膽太き奴なり。汝さばかり手なみあらば、我々と勝負を決せよ萬に一つ我輩に勝つことあらば此山に上るべし、若し負けなば活しては歸さじといふ。動之助莞爾と笑ひ、我は武者修行のために旅をする者なれば、そは望む所なり。いで勝負を決すべしと云つひ、立上りて身構すれば、先づ一人矛を

捻りて突かくる。心得たりと刀を抜き、飛上りてははしと打ち、沈みては丁と斬り、風にもまる、胡蝶のごとく、雪を持ちたる柳の枝の弱氣に見えて強きが如く柔よく剛を制する手練、凡人ならぬ太刀すぢを、見かねて残る一人も、鏝をさ、けて斬りつけたたり。動之助は二人を相手に小太刀のあしらひ、牛若丸が鞍馬にて木の葉天狗と戦ひしを、今見るごとき形勢にて、勢ますく、猛かりければ、二人の山人何かは以つて敵すべき。高這してぞ逝去きぬ。動之助は刀をおさめ、かの奴原は山賊ともおもはれず、熊とりの猿者にや何にすれいぶかしき者等なり。此山の奥見極めずばあるべからずと思ひつ、清水を掬して咽をうるほし、松明も焼盡したれば、月の光に乗じてなほ上りゆくに、いまだ初秋なれど、深山のゆるにか、冬の時の如く、寒風肌を透して堪えがたし。かくてゆきく、猪のかよふ道だになき所に到りければ、蔦葛に取つき木の根岩角を階に踏み辛うじてゆくにやうく、一條の路ある所に出たり。さて四邊を顧るに、此處は草木なども世の常

ならず、峙ちたる岩石なども都て目馴れざる物なり。孔雀石、綠青石、紺青石、石英、琅玕、石牡丹、石木賊のたぐひも見ゆ。山中に海石のまじれるも一奇事なり。蟹石蛤石の類ひの貝石多く路の傍にあり。沙は金色なるもあり五色なるもあり。方解石は鑿々として餅を刻みたるがごとく、舍利石は皓々として露の滋きに似たり。殊に怪むべきは野曝の白骨を散しおきたる如き石あり、是れいはゆる野曝石なるべし。是等の玉石奇石玲瓏たる月の光に耀きければ、好景えも云はれず、人間を出て仙境に入りしかと疑はれぬ。此外見も及ず聞きも傳へざる奇石多ければ、動之助は奇異の思ひをなし、しばらく四邊を眺めてぞ居たりける。

十五 宿かして名をなのらする化石の鍋蓋

萬仞の青壁剣を削り、千丈の碧潭藍に染り、礎とたる蛭牙山の奥深く、玉石奇石交はりて、たむ巖をきりひらき、つくり懸けたる草屋あり。苔蒸したる白石樹は青龍の雲を出づるに異ならず。斜に伏したる黄瑪瑙は、猛虎の風を起すが如く

かたへは深き谷川にて、漲る音の凄まじく、石鐘乳は時ならぬ軒の冰箸とあやまたれ、石燕の飛ぶ外は鳥もかよはぬ所なれど、住めば都と思ふにや、篝火といふ此の家の娘、主人の留主に唯獨り、灯火に向ひ居て、砧打つ手のたゆげなり。折節來る猿者の、晝狐の髭四郎主人の留守を見こみにて、簀子の上にのし上り、だみたる聲していひけるは、コレ娘夜なべ仕事をとりおきて、こちのいふ事聞きめされ。あたら花を此様に、深山木にして朽さする便なさよ、折々來ていふ如くこちの心に従は、此山を連れて退き、都の花とながむる氣、得心なきかいかにと、いひつ、ひしくと寄添へば、突倒し、あな汚はし母さまの留主といへば、來ては嘯り妾をせむる五月蠅さよ、母さまに告げきこえ、辛目を見するぞと、いふをも聞かず又さし寄りて猿が秤を揉やうなる身ぶりをすれば、娘はなほうるさく思ひ、袴衣の杵で頭をはしと打退くる。髭四郎は頭を打れて腹立ちつ、手負猪狼の類ひと云へど手捕にする男なれど、戀なればこそ猪のやうに直くなれ、

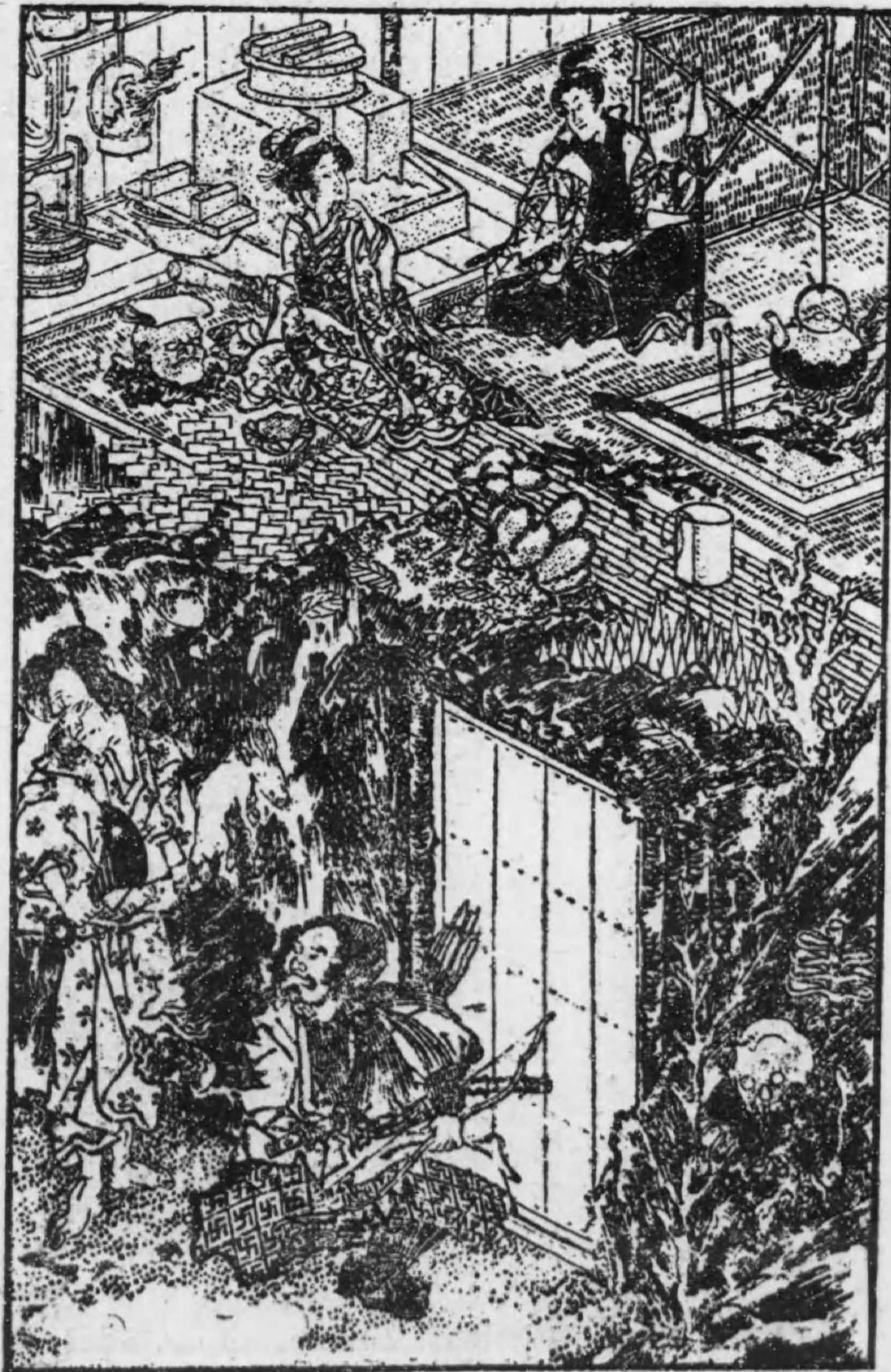
よし、我いふ事をうけひかぬ報は、此の家の主人雲根の老女のおしき仕業を、縣司に告げ聞え、やがて憂目を見すべきぞと云ひつ、立つを引とゞめ、「それを告げてすむべきか。」すまぬと思は、うけひきたまへと、いふに娘は口籠る。こなたは急で、いでいかにくと云はれて娘は胸に釘、當座を欺き母に告げ、いかにもすべしと心をさだめて笑顔をつくり、さばかり深くおぼす心を、無解に聞かぬも心なし、いかにも其方に従ふべしと、云へば此方は細目になり、それは實かなうれしと、掌を合して拜みつ、しからば後刻に此背後の岩蔭にしのおべし。よき時分これを吹きて相圖をと、いひつ、鹿笛を取出して娘に與へ、燈火消して合點かと、むくつけき山人も戀には心をなやましつ。先づ酒買ふて祝ふべしと、穴熊の一番鎗を突止めたる心地して、獨り喜び歸りけり。娘はあとに腹立顔にて自ら頭をさぐりつ、今朝結ふた大事の蟬鬢を、此やうにそこねさしたる憎さよと獨語ち、再び砧を打居たり。彼所には動之助暫しやすらひ居たりしが、遙むか

ふに火の光閃めきて、砧を打つ音聞えければ、必らず人家あるらめと思ひつ、火の光を目當にゆきて、彼草屋の門に彷徨、もの、隙より裏を覗ひ見てけるに、十七八ばかりなる美麗娘、紅のこぞめの梅の小枝に春霞立田の山の鶯といふ文字を縹に染抜きたる木綿の振袖を着たるが、帯しどけなくひき結び、額髪の顔にこぼれかゝりたるえもいはれず、人の斬首を臺にし、人の腕を杵にして衣を擣ちてぞ居たりける。かく人跡たえたる深山に人家あるすら審しきに、世にすぐれて美麗娘唯獨り人の腕首を砧にして、平々たるけしきこそ怪しけれ。これは眞の變化にや、何にまれ宿を乞ひて試むべしと思ひ、門の戸を打た、き、これは道を踏迷ひて難義におよぶ旅人なり。一夜の宿を恵み給へと聲高やかにいへば、娘は砧の手を止め、否こ、は人を宿す家ならず、彼處の谷に下れば麓に到る道あり。疾くくゆき候へと云ふにぞ、なほあなかりに乞ひけるに、娘は其いらへもせずこちは情の心をもて此處に宿さじと思ふに、其心も知らで死地に入るを好む命し

らずの旅人やと、口の裏に吐くが灰かに聞えければ、益々あやしみ、宿かす事となりがたくば、少刻のあひだ憩せてよとて、なほ急はしく戸をた、けば、娘は腹立しけに立上りて歩み出で、戸を引あけて月あかりに動之助が容を見れば、玉を欺くばかりに美麗若衆なれば、忽ち眷戀の心を起して、心頭突々と跳り、あからめもせず打まもり居けるが、暫しありて云ひけるは、主人の留主といひ故ありて人を宿しがたく思へど、おん身ならば妾が命にかえても宿したく思ひ侍るなり。いざ給へといひつ、手を取りて裏に迎へけるにぞ、動之助は身上の塵を打拂ひ、脛巾をとぎ、草鞋を脱ぎなどすれば、娘は急はしく笕の水を石の鉢に汲み入れて足を洗はせ、何にかあらん黒き石を圍爐裏に打くべて火を燃し、此處は深山ゆゑに寒さも早し、いまだ初秋なれば見給ふごとく、妾は綿入を着はべり、おん身は夏衣なれば寒さに堪へ給ふまじ、いざ火にあたりて身を温め給へ。あら山に踏迷ひ給ひ、さぞな詫しう覺されん、飢もしたまひつらんなれど、かゝる石山にて辛



洞奇舟船人夜後
首石山經中



菜一房さくり得ざれば、薦め參らすべき物もなし。せめてこれなりと召し給へと云ひて、折敷のうへに白き絲のやうなる物を盛りて出せり。動之助はもてなしの厚きを謝し之を食ふに、少し甘味ありて忽ち飢を忘れたり。これは何といふ食物ぞと問ひけるに、娘はいく、他になき物なれば知り給はぬも宜也、そは石麪といひて此あたりの岩窟に生ふる物にて我々が平日の食なりといふ。動之助はこれを聞き、よく見れば折敷も石なれば益々いぶかり家内をかへりみるに、砧の腕首も石にて、火桶、灯臺、絲車、麻笥、鍋釜の蓋、播槌、播盆、切机のたぐひの雑具、總て皆石なり。其うちにも石の枕は昔語の一つ家を思ひ出して恐しければ、轉いぶかしみて其ゆるを問ふに、娘はいく、此處は玉石奇石多ければ、奇石が洞と呼び候。彼處なる谷底に川あり、よろづの物を其川水にひたし置けば自ら石に化すゆゑに、化石谷となづけ候。妾が家の雑具すべて石なる、皆かの谷川にひたして石にせしなり、しかすれば萬の物かたくなりて破損せざるゆるなり。

今爐火に焼きたるは石炭なり、此灯火は燃石と云ひてよく燃ゆる石なり。松明の代りに燃してともし候と云ふにぞ、動之助はこれを聞き、さては聞きおよぶ化石谷といふは此處にてありしかとやうく不審晴れにけり。さて娘は振袖の袂を口にくはへ、背後ながらにより添ひて、いとほづかしけに云ひけるは、いづれの國にや京の女郎田舎の女郎とかいふ石もあるよし、都の花の京女郎も、深山木の田舎女郎も心の實に二つはあらず。女子の念は岩をもとほし、思ふ男を慕ふては、石にもなると聞きはべる、日陰の木々はおろかにて、石に花咲く谷もあり、岩間にたまる清水にも、月影はうつるぞかし。一河の流も他生の縁、今夜お宿をいたせしも、深き縁と覺さずやと、心の裏をほのめかし、人に馴れねば面はゆく、顔に紅葉の木の葉石、磨あけたる水晶に、縁をこぼす額髪、くれなる匂ふ口紅は、沙の中の珊瑚砂、顔に袂の隔て垣、まだ初戀の咲きそめぬ、苔の花の石梅に、色を含みて可愛らし。動之助は娘が戀を幸ひに此家の様子を覗はばやと心にうなづ

き、落る花に心あれば、流る、水にも情あり、さばかりに思ひたまはる志さら
 く、仇におもはずと、靡きあふたる絲薄、ひとつに落つる白露に、濡れの緒ほこ
 ろびぬれば、娘はうれしき限りなく、動之助が手を取りて、一間の裏に伴ひゆき
 ぬ。かくて時刻もや、移り、山風はいと烈しくぞ吹き渡る。此家の主人は雲根と
 いへる老女にて、雪をあざむく白髪を肩に打亂し、幾年ふりし女蘿の古松にか、
 りしごとくにて、面は節木のやうにからびたるが、石綿といふ物をもて織りたる
 衣の裾を高くかけ、かた手には弭みじかなる弓に獵箭を握りそえ、かた手には
 兎を提げ、老を見せざる健さ、谷の險阻を上りつ、家路に歸り門首より、娘今
 戻りしぞ、娘々とよびければ、かゝり火は一間の裏を走り出で、いつよりもおん
 歸りの早かりしといへば、今夜は山風騒がしきゆゑに、鹿も猪も驚き走りて手に
 あはず、化石谷の岩陰にて、やうく此兎一つとりて歸りぬ。酒は晝ほど買ふて
 あり、是を肴に寢酒飲まんと、云ひつ、あたりを見まはして、脛巾草鞋などの解

き捨てあるを見つけ、旅人を留しかといへば、娘は寛の水に手を清めつ、され
 ば候道を踏迷ひしとてわぶる旅人を宿し侍りといふ。老女はうなづき、そはよく
 せしぞ、如何なる體の旅人にや、我まみえて試むべし、奥の間に居らば此に伴へ
 と云ふにぞ、娘は心得つといひて一間の裏に入り、動之助を連れて出來り、これは
 妾が母に侍りといへば、動之助は宿をかりし禮をのべなどするに、老女は動之助
 が爲體をつらく見て笑顔をつくり、かゝる山深き栖なれば、萬事足らぬがちな
 れど、若しわびしくも覺さずば、ゆるやかに旅の勞れを休め給へと、いと懇に
 いへば、娘は母の詞を幸ひに、のう旅の郎、母もしかまうせば十日も廿日も十年
 も百年も此におはせ、必らず見捨て出ゆき給ふなど、いふ詞のはしなく、自然
 と戀はあらはれぬ。動之助も打解けて、母子揃ひての厚き情、謝すべき詞も候
 はずと云へば、老女はほ、笑みておん身は何處より何處への旅なるや、動之助偽
 りて云ひけるは、拙者は原下總の葛飾に住む武士の浪人の子なるが、繼母に憎ま

れて追出され、立寄るべき蔭なきゆゑ、越後の國にある少しの所縁を心あてにゆく旅なりといふに、老女又いはく、そは傷はしき事なり、卒爾なることなれど、我此娘見給ふごとく、身材高く生立ちぬれど、いまださだまる婚なければ、明日をもしれぬ此老が亡後は、いかにして世を過ぐべきと不便に思ふは親のならひ、此山住のいぶせきを厭ひ給ふ心もなくば、おん身を婚にと云ひさして娘を見れば、かゝり火は顔赤くして愧ぢらひぬ。動之助は老女の詞にしたがひて、なほ様子を探り見ばやと思ふにぞ、近く寄り、そは有難きまでに、忝なき仰せなり。今聞え申せし如く、水鳥の陸に迷ひ足なき蟹の身の上なれば、此家の婚となし給はひ、上なき幸ひなりといふにぞ、老女は喜び、善は急けといふ言あれば、今夜假に婚姻の盃をさすべきなり。娘戸棚の酒もて來よ、竈の下を焼きつけよ、我は兎を料理して肴にすべしといへば、娘はいとうれしみつ、俄に禪禪ひき結ひて、母と共に立働、石の切机、石刀、料理終りて石酒壺、石の盃とり添えつ。松吹く風

の颯々々を、祝儀の謠に聞き做して、三々九度もかりそめに、婚儀はやがて済みにけり。老女は益々喜びて、何をがな婚引出にと云ひつ、四邊見まはして、釜の蓋を手に把りあげ、今からは釜の下の灰までも、婚どのにまゐらする、證はこれとさし出せば、動之助はこれを受け、心ありけな引出物、拙者も何かな納采のしるしと思へど、憂旅なれば、一物も貯へず、せめてこれをと、側にありあふ鍋蓋を把りあげつ。破鍋には引替へて、筑摩の祭數もなき、玉の器の娘子に、似合ぬ拙者は此緘蓋とさし出し、互ひに探る心と心、謎は解けねどうち解けて、これ娘まだ山住に馴れぬ婿殿、必らず夜風を引かさぬやうに心をつけよ、奥まりたれど、碓造の亭座敷は、屏風岩にて風をふせけば暖なるぞ。彼處へ伴へ婚どのゆるやかに寢給へと云ふにぞ、然らば宥し賜はれとて、動之助は立上り、娘が案内に打連れて、彼處の一間に入りけり。後には老女眉を擧め、かの若者の爲體審しく思ふゆる、婚に望むに否みもせず、いよく合點ゆかざるゆゑ、今世にはびこる

足利の家の紋二引兩に譬へたる此釜の蓋は、四海におほふ引出物なりと謎をかけしは、足利方の間者ならんと思ふゆゑに、我も足利家に所縁の者なりと思はすべく思ひて與へたるに、彼又中黒の紋にたとへたる鍋蓋を、納采なりと謎かけしは、我を南朝の味方と察し、おのれも南朝に心をよする者なりと思はせて、我心をゆるさせ、我素性を探らん爲の計略ならん。若年に似合ざる即座の頓智といひ、かゝる深山へ唯獨り上り來つる大膽不敵、唯者とは思はれず、別にまた如何なる謀計あらんも知るべからず。大事は小事よりあやまつなれば、今夜のうちに唯一打と、獨り點首く折しもあれ、相圖の飛礫に石蛤をはつしと打てば老女は心得立出て戸を引あくれば、燃石に火をともし、門方に控へし手下の猿者、秦龜の泥九郎、山蛭の血平太、兩人ひとしく云ひけるは、先刻此山の半途にて、旅の若者に出あひ、矛と鏑にて戦ひをして試つるに、劍法を精熟し、しかも早業にて我々敵しがたきゆるに、這々逃退き候なり。彼奴唯者とは思はれず、此よし註進

仕ると、云ふをおさへて、聲高にもいふな、其若者は此方に泊めおきぬ。果して我推量にたがはず、いよく足利方の間者に疑ひなし。我彼奴を今夜の中に打取らばやと思へども、若し打漏さばかの磯造の亭座敷の軒口に釣おく礫石を打つべければ、其方にも貝石の螺を相圖に吹合せ、かの活道を遮ぎりて打ち取るべし。若し又死地に入らば自ら死すべければ手を下すに及ばず、又此方にて打取らば、かねて示し合せおきたるかの相圖をあぐべきぞ、此通り手下の者等に残りなく云ひ聞かせよと耳語ば、兩人の者は打點首き、早足を出して馳せゆきぬ。老女は門をさしかため、石の刀を取出して腰におび、灯火を吹消して拔足しつ、亭座敷に歩み寄り、梯の上に二足三足上りしが、いなく娘が目を醒しなば必定妨けすべければ、寢鳥をさすに如くまじと、巖に下りて床の下にくり入り、石の刀を引抜きて、突上ぐる簀子のうへに、あなやと叫ぶ聲もろともに流る、血汐仕すましたりと思ひつ、忙はしく梯を上り、明障子を踢放して、月影にすかし

見るに、思ひもよらぬ手下の猿者、晝狐の髭四郎、朱に染まりてのた打ちつ。旅人も娘も居ねば、やあ取逃せしか口惜さよと獨語し、かねて用意の雷椎を取上げて、掛おく相圖の磐石を打んとせしに、屏風の蔭より娘かゞり火走り出で、其手にすがりて止むれば、老女は眼を噴らしつ、さては汝色に迷ひてかの若衆めを逃せしな、憎き奴、こゝを放せと突倒して、又も打たんと踏出す足に、倒れながら取りつきて、手弱き力に止むる娘、老木の松に藤波の纏ひつきたる如くなり。娘は聲をふり立て、これ母さま妾が云ふこと聞きてたべ、日來おん身のおしき業此山に迷ひ来る旅人を止めおき、剛臆を試みて強者は味方につけ、弱者は打ち捨て、又剛なれども味方につくをうけひかざれば、手下の者にいひつけて道を遮り殺さすゆゑ、非命に死す者幾人といふ數しれず。其悪報は必らずおん身にかゝるべしと平日に妾が諫むれども、聞入れ給はぬ無得心、先刻此髭四郎が妾に戯れ得心せずば母人のおしき仕業を訴ふると云ひし故、僞はりてうけひきたる體にも

てなしたるを實と思ひ、しのび來つるを幸ひに、相圖に與へし鹿笛を吹き、おびきよせて彼旅人と入りかはらせ、おん身の手にかかけさせしは、訴人の難を脱れんため、旅人を逃せしも、全く色に迷ふにあらず。生ひさきある若人を、殺さんことのいたはしく、二つには母人に罪つくらすを厭へばなり。此の處を聞きわきて、其相圖の石をうたず、何卒助けたまはれと、泣くくいへば老女は益々怒りをなし、我心には大望あり、汝等が知る事にあらず、彼者を逃しては我家の様子他に漏れて、大望の妨げとなるなれば、助くる事は成りがたし。放せくと争ふひまに、髭四郎起上り、痛手に屈せぬ強氣者、さては我を忍せしは殺させん爲なりしか、憎さも憎し、いよく訴人になるべしと、いひつ、岩下に飛び下る。折しも下には血平太、泥九郎兩人ひとしく來か、りければ、老女は上より聲をかけ、心變りの髭四郎、それ打取れと下知すれば、二人は心得かけべたち、ひとしく石の刀を抜きて斬りつけたるに、深手で弱らぬ髭四郎、同じく刀を抜放して、二人を

相手に打合ひぬ。老女も益々氣をいらち、取付く娘を突退けて、磬石を打鳴せば、忽ち四方に吹立つる石の螺、山響高くひびき合せていと凄しく聞えつ、遙の山間、谷間に許多の松明かゝりやきて、列なる星の如くなり。娘は四方を見渡して、獨氣をやみ身を悶えつ、案内もしれぬ此山中の、ゆく道々を塞がれては、彼のお方はかならず打たれ給ふべしと。歎く涙のひまよりも、圍を解かせ退かする相圖はかねて聞きおきしと思ひ出して此方にかけて下り、埋火を外の方に持出す曲玉帝に貯へたる、螢砂を掌に握りて火桶のうちに打入るれば、火氣にしたがひ螢砂空に高くのぼりけるが、相圖を合する螺の音もやみ松明の光も漸々に消えけるにぞ、娘はやうく安堵して胸撫おろす時しもあれ、何者ともしれず、巖の蔭よりあらはれ出て、娘を捕へ口をおさへて小脇に抱き行方も知れずなりにけり。老女はこれを露しらず、螺の音やみ松明消えしをいぶかりつ、なほ磬石をつゞけ打ちに打ちけるが、下の方を見おろせば、血平太泥九郎の兩人髭四郎に斬立られ、

いと危く見えければ、老女は雷槌をなげ捨てて大きな吸針石を取上げつ、髭四郎が働くに従ひて、上よりこれをつかひけるに、血平太泥九郎の兩人は石の刀、髭四郎が刀は常の鐵刀なれば、吸針石の氣勢にいざなはれて、刀の手の裏狂ふ所を二人の者は得たりとし、疊みかけて斬りつけたれば、髭四郎はついに打れて死してけり。此髭四郎は別人ならず、是れ則ち前の月餘五郎が住家の竹林にしのびて餘五郎を打たんとしたる堂左衛門が僕なり。原猿者なりしゆる其後又此業をして雲根の老女が手下となりしが、鹿笛の音に吹かれて殺されしは、妻戀鹿を數多殺生したる報なるべし。去程に動之助はかゝり火が情によりて危急を免かれ、包を背負ひて彼家を逃れ出で、松明に替よとて娘が與へたる夜光石といふ物は、我身の四方五尺ばかりを照し、外より見れば光なし。折ふし月雲がくれして暗しと雖も、かの石を以て道を照して走りけるにぞ、恰も白晝をゆく如くなり。又娘が教へけるには、是より東の方遙先に路二條あり、一條を死地と號け、一條を活道と

號く。瑪瑙の巖聳えたる方は則ち死地なり。是立山の地獄に續き三稜石と云ひて
 劍の山の如き巖あれば行くこと能はず。水晶の巖ある方は活道にて、則ち化石谷
 の下に出で心安く麓に至る道ありと云ひける故、教への如く活道に入りて走りけ
 るに、忽ち背後の方に磐石の音響くと等しく四方に螺を吹き合せ、許多の獠者等
 松明を振照らして走集り、動之助を取圍み、矛鑊山刀の類ひの得物々々を打振
 てぞ向ひける。動之助は止むことを得ず、兩刀を抜きて左右の手に打振りつ、
 風の如くに打ならし、雲の如くにさへぎらし、多勢を相手に戦ひけるが、劍法手
 練の早業に、斬立てらる、獠者等、瓜の如くに砍倒され、匏の如くに打割られ、
 死人多しと雖もなほ入かはり立かはり、四方より取圍みて隙間もなく戦ふにぞ、
 さしにも猛き動之助も双拳四手に敵しがたく、ほどなく危く見えたる處に、夜霧
 深く立籠めたる裏に叫子笛の音聞えけるが、忽ち黒き装束したる武士三人、空木
 を出づる荒熊の如き勢して走り出で、銕をそろへて獠者等の群中に斬つて入り

旋風の如くに駆廻りて戦ひければ、獠者等は敵する事あたはず。蜘蛛の子を散らす
 がごとく四角八方へぞ逃散りける。三人の武士は道暗ければ長追せず、舊所に
 歸りしに、動之助は審し、何等の人なれば我危急を救ひ給はりしぞと云ひつ、
 彼夜光石を以つて三人の面を照しみるに、一人は南方十字兵衛が兒子南餘兵衛、
 残る二人は北岩倉の僕露助、山咲庄司が僕夢平なれば、こは思ひ掛けずといひて
 益々いぶかしみけるに、南餘兵衛云ひけるは、拙者が主人山咲庄司君命によりて
 俄に旅立ち、我輩を具して當國に到り、今此山の麓なる假名寺といふ寺に旅宿せ
 り。然るにおん身今夜獨り此山に登り給ひしと聞き傳へて危く思はれ、我輩を召
 し、汝等今宵彼山に登り動之助若し危き事あらば救ふべしと命ぜられしによりて
 此如と云へば、動之助は今に初めぬ庄司が厚意を感激し、四人しばらく休息し
 て居たりけるに、かの血平太、泥九郎の兩人、石の刀を抜きそばめて、岩の蔭よ
 り歩み出で、動之助と南餘兵衛を欺打にと斬りつけたり。此方の二人は急がはし

く身をひねり、動之助は血平太が首をはつしと打落し、南餘兵衛は泥九郎を腰車に斬放し、兩人一度に刀を拭ひて鞘におさめけるが、南餘兵衛動之助に對ひて曰く主人庄司おん身にまみえて密談ありとまうされたれば、一旦假名寺へおはして御對面あるべしといふ。時已に東しらみ、山鴉鳴きさわぎければ、四人ひとしく麓をさしてぞ下りける。

前に庄司南餘兵衛に對し、深山の濕地と雖も遠く音を發する叫子笛をつくれ他日自ら用うる時あるべしといひしが、果して此時川たちぬ。

十六 おもしろうて頓てかなしき鵜養の腹切

其積礫を翫びて、玉淵を窺はざる者は、未だ驪龍の蟠る所を知らず。其弊邑に習ひて、上邦を視ざる者は、未だ英雄の纏る所を知らずといへる吳都賦を、思へば越の中國、蛭牙山の崖を背後になし、龜毛川の流にそひ、兎角といへる村中に閑作といふ鵜養あり。頭に雪は戴けど、面は朱をそぐが如く、古來稀なる七十

歳の、翁と見えぬ岩疊作り、營む業は朝暮に、龜毛川の鮎をとり、唯殺生を事として、波の滴の腰蓑に、露の命をつなぎ船鵜舟に灯す篝火の、消えなん後の闇路をも更におもはぬ罪業は、日々に深くぞなりぬらん。柄のかたへに幾年を、經るともしれぬ大木の古松あり。空に注連のひきたるは、様子ありけに見えにけり。頃しも七月盂蘭盆の時なりしが、さすがに盆中は殺生の業を休み、靈棚をいとなみつ、菰筵に杉の葉垣、茄子の牛に瓜の馬、椀の箸に土器も、土になりたる人の爲、淨土の風に瓔珞の、ゆらくが如く掛渡す、粟穂稗穂に青匏瓜、濁りにしまぬ蓮の葉も、露の手向と見えにけり。村中の鵜養等主人の招きに寄集ひ、靈棚の前に圓居して、百萬遍を繰る念珠の、手つきも常に手馴れたる、鵜繩さばくが如くなり。主人の閑作音頭取り、發願以至心歸命阿彌陀佛、念佛衆生接取不捨と鉦打ならず一越調の、聲もゆがめる小屏風に、押散らしたる追分繪の鬼の念佛に異ならず。老たる若き打交りて、調子違ひの六字詰は、巖にむせぶ谷川の、黃瀬

魚の聲かと疑はれ、尻聲のなき責念佛は、松の嵐に鳴き交る、秋の蟬かと怪しまる。欠まじりに退屈の、念佛を奥齒に噛みくだけば、いづれも御苦勞これからは願以此功德平等に、主人ふりすべしと云ひて、鉦打おさめ念珠取りおさめて、閑作は皆々に打向ひ、闇を好むが鶉養のならひ、月の半は月夜といひ、殊に盆の中はどれもく、休を幸ひ、明の十五日が冥日にあたる亡者があるゆゑ、今日の待夜に志の百萬遍、よう勤めて下された、心ばかりの蓮の飯、新酒などまらしてもてなすべし。あれ見給へ盆中は、鶉籠をひらきて鶉等にも樂をさするが罪ほろぼし、こちらも盆が骨休め、跣踏とも寝まうとも、心まかせに打くつろぎて語りめせ、といひつ、地獄の釜の蓋、あけて盛りだす蓮の飯、薄き新酒の磁罈酒、精進肴取そえてさし出せば、遠慮會釋もなみ居たる鶉養等、辭宜挨拶もそこく、に施餓鬼にあひたる亡者の如く、或は食ひ或は飲み、咽に痞へて咽せかへるも鶉養の罪と思はれぬ。かくて漸時移りて、暮影に鳴く晚蟬も、野邊の鶉に音をゆづり

芦花の風雪を散らし、殘螢の光燈を點じて、日も既に暮れければ、鶉養等はあぐまで食ひいたく酔ひつ、我家く、に歸りけり。さて此閑作につかふる下男に崩築の吳呂藏といふ者あり。此時船に橋さして歸りきつ、岸の柳に船を繋ぎ、權をかたけて裏に入り、訛たる聲して、最早念佛もすみましたか、おん身獨りでさぞな忙はしくありつらん、今夜は空に雨氣が見ゆれば船にも苦をかけました。といへば閑作、唯々それはよく氣がついた、高燈籠にも火を燃し、彼等が飲食に取り散らしたる此器ども、取りおさめよ、鶉にも餌を飼ひ魂棚にも灯明したてよ。といひつ、樽を打振りて、五升ありし此酒を、滴も残さず飲をつた、寢酒なくては寢つかれぬ。何かの用をしまふたら、一走買ふて來よ。序に豆腐小半丁、線香二束錢は彼處に出してある、我は少刻休息するぞといひ捨て、奥の一間に入りけり。吳呂藏は何くれとまめやかに立働、門に立てたる高燈籠にも火を點し、これであらまし用はすむ、唯一走りといふた所が酒屋へ一里、豆腐屋へ半道、菖蒲

が池の狼に油断がならぬと獨言し、權のさきに樽をく、りて打かたけ、松明を携へて、いそがはしけに出去きぬ。夫飛花落葉のはかなさを觀ずれば、妻子珍寶何かせん。生死長夜の夢の世を、驚き悟る人なるか。まだ年若き修行者の、笈を負ひ錫杖をつき、打鳴らす鉦の音いろは松蟲の、草葉に鳴くが如くにて、高燈籠を目當に來り、殘螢の二つ三つ風に亂れて露深き、葎の門に歩みより、これは廻國の修行者なるが、行暮れて難義に及ぶ、一夜の宿を御報謝におづかりたしといひ入れたり。閑作は一間を出て門の戸をあけ、今日しも亡靈を祭る日といひ亡ぬる人の待夜なるに、修行者のおはせしこそ幸ひなれ、いざ此方へと迎ゆれば、然らばゆるし給はれとて、修行者は裏に入り、草鞋を解けば、閑作は苔井の水を汲取りて足をあらはせ、龜末の齋飯を調ずる間、回向を頼み候とて、いそがはしく奥に入りぬ。修行者は笈をかたよせ、魂棚に向ひ居て、先づすゑおきたる位牌を見るに、延文四年三月十五日打死、大佛九郎貞直靈、としるしたり。修行者はこれ

を見て、或は驚き或は悲しむけしきにて、落涙袖をしぼりしが、良ありて懷より香包を取出して香を焼き、鉦打鳴し、南無亡靈頓證佛果菩提、南無阿彌陀佛ありだ佛と唱へつ、回向をしてぞ居たりける。時に香氣馥郁として、家内に薰じ、世の常ならぬ香なれば、閑作は一間の障子を細目にあけて香の薰を訝しむ。か、る折しも蛭牙山の雲根の老女、此門首に來か、りて、これも香氣を不思議に思ひしばし窺ひ居たりしが、何か心に點首きて、家の背後に廻りゆく。修行者は回向を終り鉦を打おさむれば、閑作は一間を出て修行者の側者く寄り、今おん身の手向給ひし名香は、楊貴妃の身摺といふ香ならずやと問ひひければ、修行者はいかにも然り、彼の香をき、知りたる和主の素性は何人ぞやと問返せば、閑作いはく、先づおん身の素性をあかさされよ、其うへにて我素性をも語るべし。といふに修行者威儀をつくろひ、我實は相模次郎時行殿を守育し大佛九郎貞直が一子なり、過つる延文四年、信州笈形落城の刻、戰場にて出生したるよし育てたる者物

語れり。父貞直打死とは聞きしかど、存亡疑はしければ、若し活ながらへて此世に在すならばめぐり會ふこともやと、かく修行者に身をやつし、諸國をめぐり尋ねしが、思ひもよらず此家に祭る亡父の位牌、さては打死に極まりしと、思へば力も落果て、むなしき位牌を拜む事よくく薄き父子の縁、亡父を祭る此家の主人は、必らず所縁の者ならめと思ふにより、探んために焼きたる香は亡父の遺物此香包を見られよとさし出せば、閑作は是を見て打驚き、いざ先づこれへと上座に移して兩手をつき、さては戰場にて生れ給ひし若君よな、今は何をか包むべきかくいふ拙者はおん父九郎貞直君に仕へし郎等魚淵劍太とまうす者、鬪らず今夜めぐりあひ奉るも、おん父尊靈の導き給ふに疑ひなし。おん父君は知具麻川に入水して、底の水屑と成給ふ。明日は冥日今夜は待夜、過し昔を思ひ出すも口惜やと、拳を握りて云ひければ、修行者は落涙しつ、さし俯向きて詞なし。閑作重ねて云ひけるは、壁に耳あり牆に縫目ありとまうせば、端近にてはおん物語もなりが

たし、いざたまへと案内して、奥の一間に誘ひぬ。かくて初更もや、過ぎて、雨雲の晴間より洩れいづる月影の、川波照らす岸傳ひに荷を擔ひて、心太を賣る商人歩み來つ、此家の門邊に荷をおろし、心太召せちうしやくも入れて候。心太の曲突を望み給はい見せまうさんと聲高に云ひければ、此村の鵜養等寄集ひ、心太の曲突とは珍しき商人、いで望みて見るべしとて取圍めば、商人は嗽きしつ、そも我商ふ心太は、伊豫の國宇和島の名産なり。漢名はあまたあり、和名は古留毛波又こ、ろていとまうすゆるゑ、ところてんと讀みなまれるなり「孟蘭盆のなかばの秋の夜もすがら、月にすますや我こ、ろてい」と詠みたる歌もはべれば、今がもなかの商物に候ぞ、冷やかにめし候へ、曲突をのぞみ給はいいでく見せまうさんと云ひつ、或は空に高く突あけて皿坏に受留め、或背後さまた突きて肩を越させ、或は突きて股をくゞらせ、或は突上げて落つる處を箸をもて挟みなどし、いろくさまぐに曲を盡して見せければ、鵜養等は興に入りさてもおも

しろき商人かなと云ひ囃して、我もくくと心太をうち食ひ、錢を與へて立去りぬ折しも川風颯と吹きて閑作が魂棚の燈明を消す暗まぎれに、彼の商人四邊を見まはし忍び入りて魂棚にするありし位牌を奪ひ懐におし入れつ、荷をになひて行方もしれずなりにけり。時に庭の苔井の裏より、大きな蛇蠢き出て、鶉の鳥の雛をくはへ、傍邊の古松の空に入んとせしが、忽ち地上に撲的とおち、のたうちまはり死してけり。彼修行者は一間の障子を押あけて、眩もせず此體を見居たりしが、あの空をこそ怪けれと心におさめて打うなづき、松のもとに寄りんとせしが、閑作は急ぎまどひて走り出て、向ふにまはりて押戻し、さてこそ偽者觀念せよと呼はりつ、一腰を抜き放ちて斬りつければ、修行者は錫杖を取りのべて丁と受留め、又斬りつくるを受流し、裏に仕込し、刀を抜きて丁々しと打合ひぬ。か、りける時崩れ築の吳呂藏は、買物を整へて家路に歸る其跡より、以前の商人拔刀を背後に隠して覘ひより、肩尖のぞみて斬りつければ、吳呂藏は身をひ

るがへしてこれを避け、酒樽を投げ捨て權に仕込し刀を抜き、拂へば退引は入り來往去回の祕術を盡し、双方劣らぬ蝸牛の角、裏には閑作修行者が、互ひにはけしき刃の音、外方には吳呂藏商人が、火出づるばかりに戦しが、何思ひけん吳呂藏は、巖の上にかげ上りて、川にざんぶと飛入りつ、拔手をきりて遊びゆく。商人は岸づたひに跡をしたひて追去きぬ。修行者は閑作が、電光石光とひらめかす刀の光に眼くらみ、勢猛に氣をのまれ、劍法亂れて敵しがたく、すでに打るべう見えけるが、ながる、足を踏止めつ、門に立てたる高燈籠の引綱をはつしと斬れば、燈籠は地上に落ち、銀河の星の山々に、列なる松明旗捺物、夜風に靡く雲の波、陣鉦大鼓鯨波、龜毛川の漲る音に響き合ひて、いと凄まじくぞ聞えける閑作は刀を引き向ふを屹と見渡して、シヤものくしき金鼓のひびき、我を打たんと鎌倉勢、遠卷すと覺えたり。たとひ萬騎の敵たりとも、なでう事のあるべきあな小點しやと冷笑ふ。油斷を見すまし修行者が、又斬りつくる刀をはつしと打

落とし、手ばやく側に引つけて、膝の下に敷きたる折しも、雑兵許多かけ來り、鎧を捻つて詰寄せたり。閑作は修行者を掴み退け、庭に降立身構して、突來る鎧を左右に握り、一つもぢれば二人一度にひるがへり、倒る、上を飛越えて、又突きかゝる鎧の血留を搾みて、蹴やれば鎧の手を放ち、四五間飛びて大勢の、群がる中に倒れたり。なほ懲すまに隙間もなく、鈍鋒をそろへて突く鎧は、篠をつかぬる急雨の如く、閃めく光は電光の、山の端めぐる如くなれど、是を物の數ともせず、飛龍のごとくに馳け廻り、猛虎の如き勢ひして、前後に當り左右を支へ、陸離々々と斬拂へば、雑兵等は敵しかね、しどろになりて引き退く。修行者は隙間を見て、背後抱にむすと組むを、腰をひねりて振ほどき、襟首掴みて動かさず仁王立に立ちたる處に、弦音高く鳴りひびきて、白羽の箭飛び來り、閑作が胸板をはつしと射たるが、うらをか、す矢幹砕けて飛散りぬ、閑作は呵々と打笑ひ、形も見せず遠矢を射たる卑怯者、我身は鐵石か、る弱矢の立つべきかと、嘲り彼

方に聲高く、

またこんと頼むの雁の別路は、待間ひさしき名残なりけり。

と思ひもかけず一首の歌を吟ずるにぞ、さしもの閑作驚けば、又いはく、大佛九郎さのみな騒ぎぞ、月影ヶ谷判官の家臣、昔元動之助氏邦見參すべしと呼はりつゝ、遙向ふの木蔭より、あらはれ出て歩來る、其促装いかにとなれば、縁なす額髪を玉なす顔に颯と振かけ、双蝶の金物打ちたる顛巻を結びたれ、小櫻絨の腹巻に、丹地の錦の陣羽織を著下して、秋野の摺箔したる白精好の大口はき、黄金作りの太刀を鷗尻にさけ佩きて、重藤の弓を小脇にかいこみ、物具の金物を月影に耀し、光渡りて歩來る、其形勢志氣堂々、威風凜々たる若武者なり。閑作は肩をゆすりてほくそ笑ひ、ことくしけに名乗し故、いかなる荒武者が出来ると思ひしに、手にも足らざる小冠者原、討手の大將などとはかたはら痛し、しかのみならず我をさして大佛九郎と呼びかけしは何の狂言、貞直殿は知具麻川に入水し

たるを知らざるや、掴み殺すは安けれども、童を相手はおとなけなし、汝が命を汝に與へてゆるしやる。疾く歸れと高笑ひ、ほざきにほざく不敵の詞、動之助は少も臆するけしきなく莞爾と笑ひ、入水といふが即ち偽り、人を欺く死間の計略、今あらはれて口惜からん。先頃謙倉梅樂寺の切通に於て、我養父替元澁右衛門を遠矢にかけ、日月の御旗を奮ひ取りしは汝なること疑ひなし。其證據は是なりとて腹卷の引合より、矢の根を出して目前にさしつけ、此矢の根に覺えあらん。養父を射たる此矢の根は、他國にまれなる鐵石、我是れを證據に仇を尋ね、蛭牙山の麓に宿り、木枯の森の邪神人身御供をとるしに射たる矢なりといふを見れば、今我が射たる白羽の矢にて、これもおなじ石鐵なれば、これぞ仇の手が、りと思ひ、人身御供の棺に入り、かの社に到りて試みつるに果して眞の變化ならねば、いよく怪しみかの山深く登りて見るに、化石谷に鐵石多くあり、又石の刀を用うることに鐵刀に異ならず。察する所梓魄となりて月影ヶ谷の御館に入り

込しも彼奇石が洞に住む老女なるべし。曾つて十洲記に云へることあり、西海の流州に昆吾石あり、劍に作るに水精の如く、玉を割るに泥を切るが如しといへり又王氷素問を注して云はく肅慎國の人枯木を以つて矢とし、青石を鐵とし、毒を施し、人に中れば即死す。これを石弩と號く。又滕州に青石を以て刀劍となすこと銅鐵のごとしと云へり。汝これ等にならひ、化石谷の鐵石に毒を施し、澁右衛門を射たるに疑ひなしと思ひし故、假名寺を陣所となし、兵具を整へ向ふたり。養父の敵といふは私、知具麻川に入水と偽り活残りて、足利殿を亡し北朝を傾けんと味方を集る謀叛の張本、大佛九郎貞直と、疾く本名名告べし。君命おもき打手の大將動之助氏邦、汝が首を打取りて、初陣の高名にすべきなりと、鋭き詞の舌劍に、勇氣烈しき閑作も、肝さき突かる、如くにて、眼血ばしり面色變り頭の汗烟の如くに立のぼり、荳花の如くなる鬚髭をそらさまにひるがへし、牙を噛み拳を握り、鼻をふき怒らし、堅庭を踏鳴らしつ、我自ら意を蟠龍に比して

泥中に蟄し、魚鱉と伍はりをおなじうして、昇天の時至るを待ちつるに、汝等ごとき小冠者ばらに見あらはされたる口惜さよ。さるにても審しきは、我苦形の戰場にて、生子に添えたる香包の裏にしるせし一首の歌を、汝今吟せしはいかなるゆるぞ、それ聞かんといひければ、動之助唯々其不審理なり、委しく語りて聞かすべしといひて、腹巻の引合せより位牌を出し、我先刻南餘兵衛といふ者を心太賣の商人に身を扮させ、奪ひとらせし此位牌に、大佛九郎貞直靈としるせしは、是則ち養父の仇の形代なり。かの豫讓が衣をさしたる例にならひ、今父の仇を報ふなり。思ひしれやと呼はりつ、太刀をすらりと抜き放して、位牌を切割いぞがはしく物具を脱き捨て、雪の如くなる膚を推膚脱ぎ、太刀をさかしまに取直して、脇腹に突立てたり。大佛九郎は益々いぶかり、汝何ゆる自殺するぞと問ければ、動之助苦しき息をつきて云く、君恩重き嚴命なれば黙止がたく、生きては謀叛の張本を打手の大將、二つには産の恩よりなほ深き、養父の爲の復讐公私とわ

かる忠孝二つ、見遁す事の能はざれば、死して親子の名告をせんと、其故に此自殺、かくいふ拙者は苦形の戰場にて出生したるおん身の實の子なるぞや。其證據見給へとて、陣羽織をさしだし、是を着して打手に來しは、かねて自殺の覺悟ぞと云ひければ、さしもの貞直肝つぶれてどつかと座し、陣羽織をとり上げて熟々見るに、まがふ方なき雲鶴の錦なれば、さては我子にてありしかと、猛き心もよわりつ、唯惘然たるばかりなり。梢ありて修行者に打向ひ、先刻汝香包を證據にして我子なりと名告しが、苦形の落城を指折りて數ふれば、今年で丁ど十八年、汝が年のころほひは二十を過ぎしと見ゆるゆる、僞者と推量し、我又汝を僞りて郎等劍太と名告しは、汝をあざむき人質に取置ん計略なり。そも汝は何者ぞと問ひければ、修行者云く、汝自我名を位牌にしるして祭り置くは、死間の奇略と察せしゆる、動之助が所持したる香包を、假名寺の陣所にて受取り、かの香を焼きて汝がふるまひを試みたり。我實は山咲庄司が一子山咲餘五郎雪村とい

ふ者なり。先頃兄山咲窓閑が隠宅に、紫の装束して忍び入り、朱塗の箱を奪ひ出たる曲者を、窓閑からめとりて責問ひつるに、大佛九郎貞直が郎等、魚淵劍太といふ者なるが、南朝の帝、古今傳授の祕書を求め給ふにより、其祕書を奪出しと白狀し、其時彼が物語にて、動之助の素性を委しく知りつるなり。大佛九郎が存亡はいかにぞと、なほ責問ひしが、入水に疑ひなしといひて白狀せず、火水を以て責たれどもなほ云はず、自ら舌を喰切りて死しつるなり。先刻汝が魚淵劍太と名告りしを實とせざるは其故なり。假名寺にてしめし合せ、此家に立し高燈籠を切落すを相圖と定めさてこそ斯ははからふたりと云ひければ、貞直はいく、しからばいよく、我子は菅元澁右衛門に育てられしな、過てりく、澁右衛門は元來主君相摸太郎殿を敵の手に渡して打たしめたる不忠至極の五大院左衛門が子なるゆゑ、一つには日月の御旗を奪はん爲、二つにはめせて其子を打ちて相摸太郎殿の讐を報はんとてせし事なるが、今おもへば恩を讐にて復せしなり。返すくも

誤てりと歎息しつ、云ひければ、動之助はなほ苦しげに息をつき、されば候生子の時より育られ、大恩うけたる養父の仇を報はんとすれば、實父のおん身を打ねばならず、それゆゑに養父の仇を射かへす心で、先刻射かけし白羽の矢の、鏃をはぶきて射かけしは、養父の爲には弓を引き、産の親に對しては、引かぬといふ心にて、是れ父子の義を二つに分けていづれをも重んずる所なり。養父の敵が實父にてあらんとは露思はず、世界のうちの悪因果を、此身一つに引受けて、苦しき者は我身なり、推量してよ父うへといひつ、そばに這寄りておとす涙は疵口の、鮮血と共にほとばしれば、烈火の如き貞直も打しほれ、又陣羽織を取上げて片手には介抱しつ、云ひけるは、苦形の戦場にて、汝が出生せし時に、此雲鶴の地紋を幸ひ、此子の齡千歳の鶴にあやかれと、心に祝せしかひもなく、霜を悲しむ夜の鶴、子を思ふて泣く爲の、證になりし因果さよ。生れたる時襦袢にしたる此羽織が、今死ぬ時の經帷子になるべしとは、争か思ひはかるべき。此錦はい

かなる者が織りなして、かゝる因果を見せけるぞやといひて羽織を、ひしと抱きしめ、萬夫不當の勇將も、恩愛といふ大敵には、背後を見せて泣き居たり。時に不思議や荒鶉ども、籠をはなれて軒轟し、鶯を鳴しつ、動之助に飛びつき、苦しむれば動之助はあなやと叫び打慄きて悶絶し、此世のうちの抜目鳥、地獄の苛責眼前、無慙なりけるありさまなり。此時月は再び又雲にかくれて暗かりしが岸に繋ぎし苦船より、山咲庄司雪森鐵巾野袴陣羽織、籠手臙楯に身をかため、苦かなぐりてあらはれ出で、がんど提灯振照らして門口に歩み寄り、裏の様子をうかがひぬ。貞直は聖靈を送る火の薪にと用意しおきたる麻幹を束ねて火を燃し松明にしてふり照らし、動之助が荒鶉どもに責めらる、苦痛の體を屹と見て、且つ怪み且つ悲しみ、涙瀾然腰蓑に散かゝりて、波の滴に異ならず。蛭牙山の雲根の老女、いつの程にかかくれ居けん、此折二階の障子を開きて座したる姿、白髪頭の鬘紐、錦の桂紵の袴、笛をよこたへ吹きならず、其音凄風楚雨の如く、い

と哀れを添えにけり。貞直涙を押拭ひ、あなあさましや身の罪業を今ぞ知る、懺悔に罪を滅すと聞けば、我憂業のあらましを語るべし。

うたひ

實にや世の中を、うしと思はゞ捨つべきに、其心更に夏川に、鶉つかふことのおもしろさよ。しめる松明振立て、藤の衣の玉だすき、籠をひらきて取出す、志萬豆巢おろしあら鶉ども、此川波にさつと放せば、面白のありさまや底にも見ゆる篝火に、おどろく魚を追廻し、かづきあけすくひあけ、ひまなく魚をくふときは、罪も報も後の世も、わすれ果ておもしろや。

其殺生の罪おもき、親の因果が子に報ひ、荒鶉の責の不便さよとて、松明を投げつくれば、鶉の鳥どもはばつと退き、動之助はつく息も、絶々にぞなりにける。雲根の老女も笛をおさめて、いそがはしく二階を駈下り、動之助を搔き抱き、苦形の戦場にて、そなたを産みたる實の母、更級といふは我身なり。産むと其儘活



別れ、いづくに居るやと思ひしに、逢へば忽ち死別の歎き、よくく薄き親子の縁、いかなる者が親となり、子と生れては來つるぞや。娘篝火が行方しれざるゆゑ、もし爰へ來はせぬかと、先刻爰へ尋ねに來て、門口に彷徨しが、修行者の燒きたる香のいぶかしさに、裏口より立入りて、様子は残らず聞きとりぬ。我子とは露しらず、足利方の間者と察せしゆゑ、殺さんとまで思ひしは、我惡業の報なり。不便の者の最期やと、聲曇りつ、云ひければ、手負はやうく起上り、さては實の母人か、親子は一世と聞くなれば、よく顔見せて賜はれとて母の手を握りつめ、見あぐる顔見おろす顔、大膽強氣の老女なれど、目をもる涙鬼薊に、露おきあまるごとくなり。先刻より門首に様子を窺ふ山咲庄司、此時裏に走り入り、いかに大佛九郎殿、戰場にては互ひに面を見しらねども、名はかねて聞き給はん月影ヶ谷判官の家臣、山咲庄司雪森とは我事なり。陪臣なれども主人の名代ゆるされて、我苦形を歸陣の折から、山風に吹落して、我手に入りし密書の一通、隠

語を以つて記せし故、事分明ならずと雖も、當名は大佛九郎とあれば、入水せしは偽りならんと、我推量に果して違はず、死間の奇略今あらはれてさぞ口惜く覺されんと禮儀正しく云ひければ、貞直も威儀をつくるひ縦令千騎萬騎をもつて攻むるとも、物の數とは思はねども、子といふもの、大敵に、敗軍したる我なれば今は包まず物語らん。我苦形の一戦にた、かひ勞れて、打死と心を定めし其折からはからず飛來る箭文の一通、披きて見れば主君相模次郎時行殿隱語を以て、自筆に書きし奇密の文、我虚腹を切りて暗に城を落つるゆゑ、汝も打死することなかれと記されしゆゑ、こはよく計られしと思ひつ、知具麻川に入水と見せて敵を欺むき、かねて水練に達せしゆゑ、水底をくゞりて逃れ去りぬと物語れば、庄司はいはく我疾くよりしかあらんと察せしなり。主君判官梓靦が詞を信じ、相模次郎殿苦形にて實に死亡ありしと思はれしは誤なり。時行殿の行方はいかにと問ひけるに、貞直は口籠りて云はざりけり。時に又陣鉦太鼓を打鳴らし、彼方の岩

蔭より二つ引兩の旗をさつと靡かして月影ヶ谷玉兎之助、身上おごそかによそひ露助夢平等兩人に案内させて岩上に出來り、聲高やかに云ひけるは、九郎貞直よく聞くべし、我父判官照影此度足利殿に聞えて、北朝の帝に奏し奉り、南北兩朝御和睦あるべきに定まり、足利殿より吉野の皇居に進奏する、御和睦の盟書をまうし受けて茲にあり。それにつき勅して時行も助命し給ふなれば、つ、まず行方をまうすべしと云ひければ、庄司も其詞の尾につきて、いで云はれよ、いで聞かんとぞ責めたりける。時に老女す、み出で其儀は妾が物語り候はん、そも相模次郎殿は、箱根水飲峠の合戦の後、深山幽谷の裏に蟄し在して、鎌倉には面を見知る者なきを幸ひ、宮奴に身を扮させ、幣又と名のらせ、わざと妾が従者の様にあつかひて世を忍せまうせしなり。又妾味方を集めん爲鎌倉を徘徊したる時、奇石の洞にある蛇石を大指にはめて諸人を欺き、蛇ヶ谷の因果婆々と呼ばれしは妾なり。其刻箕原蟻右衛門、袴田紺九郎等を味方につけしが、彼等慮淺きゆゑ、

密事あらはれ出奔して、其後戮せられたるよし、鎌倉の風聞にこれを聞きぬ。又都にありし時、五條坂の阿曾比、吾妻が所持したる濡髪の名笛を奪ひしはれは原亡君相模入道殿の秘藏の笛なる故に、おん形身とも見ばやと思ひて奪ひしなり。則ち今吹きたるは其笛なりといふにぞ、餘五郎はこれを聞き、老女をよく見見るに見知りあれば、さては其時我に備はれたる老女はおん身にてありしかといへば老女は打うなづきつ、又いはく、實にめづらしき對面なり。其後妾太麻の靦女と名告りて、再び鎌倉にありし時、月影ヶ谷判官の息女、病に惱むと聞き、幸ひ時行殿宮奴に扮して鶴ヶ岡におはせしゆゑ、靦女の噂をさせ、月影ヶ谷の館に入り込み、梓の弓を載る器の裏に火氣を仕込み、化石谷に生ずる蛭石といふ奇石を暗に洗米に交せて蒔散し、火氣にしたがひ蛭の蠢くやうに見ゆるを洗米眞に蛭に化したりと思はして欺きしも、日月の御旗を鶴ヶ岡の神庫より出さしむべき計略なり。又我々夫婦一つ處に住まざるは人の疑ひを厭ふゆゑなり。妾は蛭牙山に別居

し、味方の者を狩者にして山中に住はせ彼等に云ひふらさせて、木枯の森の邪神と偽り、白羽の矢をしるしにして人身御供を取しは、其子を遠國に賣渡して軍用金を貯へぬ。獸の皮に化石谷の天狗の爪石といふものを植ゑて、これを妾か手におほひ、眞の變化と思はせたり。或は奇石、洞化石、谷の玉石、藥石を取出して黄金に替えぬ。又礮に用ゑたる石の腕首は、原化石谷に葬りたる、五大院左衛門が死骸の石に化したるなり。彼が遺骨をばづかしめ、相模太郎殿の恨をばらさん爲に礮にして常に打ちぬ。今思へば人身御供と偽りて、人の子を奪ひたる我惡報、忽ち我子の身に報ひ、かゝる憂目の罪科を、滅せんための懺悔話、此家の下人崩れ築の吳呂藏といふは、則ち宮奴の幣又にて、實は相模次郎時行殿に候なり。いよゝゝ助命給はれかし、妾は過つる元弘三年鎌倉にて打死したる、長崎勘解由左衛門爲基が妹なり。素姓を語るもはづかしやと云ひければ、庄司いはく、さればこそ女に稀なる膽氣の烈しさ、おん身等夫婦はなみくゝならぬ人なるに忠

義には似たれども、善をもつて行ひとせざる事惜むべし残念さよ。崩れ築の吳呂藏といふは時行殿に疑ひなしと、我推量に露たがはず、助命の儀は氣づかひあるなと述べければ、老女いはく、それ聞けばもはや此世に望みなし、我子と共に死出三途の旅立せん、去りながら娘かゝり火にあはで死ぬるが残念なり。南無阿彌陀佛と唱へつゝ、懐劍吮に突立つれば、貞直も居直りて、今妻の語りしごとく、夫婦こゝろを盡しさまゝの罪をつくりて貯へたる軍川金は、まさかの時の鎧腹巻、これ見られよと諸膚脱けば、肌着にひしと許多の黄金を縫ひつけて、鶴の羽を重ねしごとくなり。動之助が射たる箭幹の碎け散りしも理なり。貞直又云ひけるは、兩朝のおん和睦定まるうへに、時行殿の助命あれば、我望外になし、唯一目あひたきは娘かゝり火、行方知れぬは不思議なり。親の死目にあはざるは、宿世なるかと落涙し、しばし歎きに沈みしが、屹と心を取り直し、大音あけて名乗けるは、桓武天皇第五の皇子、葛原親王に三代の孫、平將軍貞盛より十三代、

相模入道高時の御内に鬼神とよばれたる、大佛九郎貞直を背元動之助氏邦、初陣に打ちとつたり。手柄を見よや、讚よやと自らよばはりつ、肌着を寛げ刀を腹に突立つれば、山咲庄司立寄りて、天晴由々しき打死ぞやと賞美して、餘五郎に打向ひ、汝が奪ひし人質はもはや用なし、父母の死目にせめてあはしめよ。といへば餘五郎心得て、笈の扉を開くをおそしと其裏よりまろび出しは則ち是れかやり火なり。父に取りつき母に取りつき、動之助に取りつき、彼方此方と迷ひつ、聲ふり立て、泣きさけび、がばと伏して身をもだえ、現心もなかりしが、良ありて起上り、動之助が携へ來たる石の矢の根を取手も見せず、吭に突立んとしたるを、老女更級いそがはしく押止め、これ娘せめて汝は生残り、我が亡後の、追善供養香花をも手向けてくれよといへば、娘は聲くもらし、今笈の裏にて委しき事を承はれば、動之助殿といふは妾の兄にておはすよし、それとは知らず愧かしながら、戀の重荷を身に負ひて、石の枕に假寐せし、此世からなる畜生道

などてながらへ居らるべきと、云ひつ、又打伏して泣沈めば、貞直いはく、其儀ならば苦しからず、汝は原我實子にあらず、十四年前我鎌倉を覗はんため忍びて立越ゆる道、武藏の籠手差原にて、大鷲四歳ばかりの兒を喰はんとするを見つて鷲を殺し、其兒を助け取りて立歸り、育上しは即ち汝なり。さる故に動之助とは兄弟ならずと物語る。庄司はこれを知るとひとしく、其兒の高頬に黒痣はなかりしかと忙はしく問ひければ、貞直いはく、それを和主はいかにして知りけるぞいかにも高頬に黒痣今にあり、それ見られよと突遣れば、庄司はつくづく打守りされば我子の小雪に疑ひなしと喜びつ、甘繩の神事の歸るさ、鷲にさらはれたることはあらまし物語り、それに居る餘五郎といふは汝が兄なりといへば、かやり火はさては妾が實の父、實の兄にておはすかとて、庄司餘五郎に打向ひ、喜ぶも又涙なり。貞直夫婦は痛手に屈せず、我々夫婦死したるあとは、謀叛人の娘と人に指さ、れ、路頭に袖をひろけても、情をかくる人もなく、憂目を見んをなけ

かはしく思ひしに、圖らず實父に廻り會ひ、手渡すれば我々が冥途までの妄念なし。よろこばしやと夫婦の者、替るゝに云ひければ、庄司は刀をすらりと抜き、養育かゝり火が縁の髪を切り取り、今より汝尼となり、貞直夫婦の菩提をとひ、養育の大恩に報せよ。やよ動之助、夫婦は二世といふなれば、後の世は此娘を汝が妻になしくれよ、此切髪、鞞引出、冥途の土産に持ち去けと落涙しつ、手に渡せば動之助はおし戴き、唯掌を合すばかりなり。貞直は莞爾と笑ひ、あな嬉しや喜しや、我も又結采のしるしとして、娘に與ふる物ありとて、左の小脇に突立てたる刀に手をかけ、右の傍腹まで切目長く搔破りて、中なる腸を手繰出し、傍邊の空の空に投入れたるに、忽ち枝葉動搖し、血しほの穢れを忌みけるにや、空の中より風を生じ、白木の箱を吹上げたり。餘五郎手ばやくこれを取りて開き見るに是れ即ち日月のおん旗なれば、其ま、玉兎之助に奉る。玉兎之助はこれを取りて恭しく押戴き、兩朝のおん和睦濟むまでは、此おん旗はおのれ暫く領かるべしとて

取りをさめけるととき、再び又陣鉦太鼓を亂調に打鳴らす。折しも烈しき川風に、一間の障子を吹倒せば、適かに見渡す龜毛川、四方の山には旗捺物、陸には松明川には篝火、天を焦せるごとくにて、水にも暉く火の光、南餘兵衛が下知にしたがひ、鵜養ども數多の船を漕出して、崩れ築の吳呂藏が乗たる船を取圍めば、吳呂藏は相模次郎時行と本名を名告りつ、阿修羅王の荒れたらんもかくやと思ふ勢にて、寄せ來る鵜養を手玉に取り、投込む水音水煙、喚き叫びて戦ふ聲、川波の漲る音にひびき合ひて、凄じかりける光景なり。貞直夫婦はこれを見て、助命と云ふはいつはりによと誂れば、玉兎之助云ひけるは必らず疑ふことなかれ、諸軍を用ひず鵜養どもに戦はすは、足利殿への聞えばかり、助命はすこしも偽りならず。いで我自ら立ち越えて時行殿に對面し、和睦助命の盟書を渡して戦をやめさすべしといへば、傍につきそふ露助夢平心得て、馬引き寄すれば玉兎之助ゆらりと乗り、一鞭あてんとしたりしが、動之助が死別を悲しみ、暫したゆたふ唐



綾の、鎧の袖におちかゝる、涙をおさへ露助夢平、いづれも續けと下知しつゝ、山を巡りて馳せゆきぬ。程なく彼方に揚貝を吹立つるとひとしく、陸の松明船の篝火、一度に消えて忽ち暗夜の如くなり、戦ふ聲も已に止みて、唯松風と川波の漲る音のみ残りけり。貞直夫婦は安堵の體、庄司は夫婦にうち向ひ、おん身等の集めし金は鎌倉葛西谷の東勝寺に寄附なして、相模入道殿一門の菩提をとふべき料となし、又人身御供と偽りて集たる、子ども等の行方をたづね、身をあがなひて其親々に返し遣はすべし。又高德の僧をゑらび、化石谷の小石を探り、たとひ宗旨は違ふとも、利益深き法華經の題目を、一石に一字づ、書かして、此川に沈めんおん身等親子三人の佛果菩提の爲にすべしと、誓ひし言は經石とも鶴養石とも云ひ傳へて末の世までも残りけり。夫婦は益々感激し、今ははやとて叱かき切りて伏しければ、動之助も共に叱をかき切りて、夫婦親子三人が、一度に息を引込に、水の哀れを残しけり。かゝり火獨り生残る歎きは筆に盡されず。貞直

行年七十歳、更級行年六十歳、動之助行年十八歳とぞ聞えける。時も時なる魂柵の、爪や茄子を其儘に、手向にするや龜毛川、西方淨土へおくり火の、鶴船を弘誓の船となし、稻葉の露に浮雲も、法華の法のたすけ船、一葉の秋と散りて行く鳴音かなしき竈馬の、髭題目の功力にて、實相の風吹きて、眞如の月の出でぬれば、山咲庄司は餘五郎に、親子三人の亡骸の葬りを懇に命じつゝ、娘も少時此家にて、佛事供養を營むべしといふ折しも、南餘兵衛走來り、相模次郎時行殿和睦の盟書を内見あり、情に刀向ふ劍なしとて戦ひを止め、玉兎君と、もに假名寺の陣所へ打越れしといへば、庄司はこれを聞きしからは、我も急ぐべしとて、餘兵衛を具し歎きを跡に残しつゝ、假名寺をさして出行きぬ。

右に記し残せし事あり。苦形の戦の時、魚淵劍太主人大佛九郎の生子をあづかり山越に落ち行きしが、鎌倉勢に取圍まれて詮方なく、生子を山神の社の裏に隠し置き身がるになりて戦ひしが、菅元澄右衛門駕籠の塵兵衛といひ

し其時、社の前を過り、生子の泣く聲を聞きつけて捨子なりと思ひ、陣羽織に包み香包を添えたるを見て、なみくの人の子にあらざるを知り不便に思ひ拾ひ取りてかへりぬ。剣太は鎌倉勢を追ひはらひて舊所に歸り、社の裏を見るに、生子なかりければ大きにくやみ、既に自殺せんとしたるが、主人の妻更級の行方を尋ぬるために生ながらへ、其後山咲窓閑が家にしのび入りに挿はれたる時物語れる事と、澁右衛門がかねて動之助に語りおきける事と符合するを以つて、動之助は苦形の戰場にて生れたる大佛九郎が子なりといふこと明かに知れたるなり。此仔細を前回にしるし入れんは管々しければ此に別記して、看官の疑を解くのみ。

十七 鶴をりて日こそおほきに和睦の酒宴

去る程に相模次郎時行は、和睦の盟書を携へて吉野の皇居に到り、是を進奏したるに、南朝の帝叡慮をよろこばしめ給ひ、已に南北兩朝御和睦整ひければ、時行

今は望足れりとして剃髪し、佛門に入り、日月のおん旗は舊の如く鶴ヶ岡の神庫におさむ。苦形の合戦より大佛九郎の亡びしまで、都て月影ヶ谷判官父子の武略によれりとして、父子ともに位階昇進あり。これによりて玉兎之助前の不行跡を悔ひおもひて、文武を勵むの外他事なし。妹婿は病全快して、梅ヶ谷郡領の嫡子に嫁し、兩家むつみ深し。又山崎庄司が忠義軍功拔群なりとて加増をたまはりければ、兒子餘五郎を歸參させ、改めて吾妻と婚姻を取結びぬ。庄司が妻淀瀬が喜び云ひ盡すべからず。南餘兵衛をも歸參させ、亡父南方十字兵衛が縁に加増して與へければ、益々母に孝を盡し、窓太郎を養育し、朝烏の刀を家寶とし、孝子の美名世に高く聞えぬ。背元澁右衛門が妻於破矢は剃髪して尼となり、篝火の尼と共に鎌倉霧が津の月輪寺の境内に庵をむすびて住む、大佛九郎夫婦および澁右衛門動之助、堂左衛門等が菩提をとぶ。五大院左衛門が五輪の塔も月輪寺に遷し建て其下に彼石の腕首を埋めてしるしとす。放駒の小柄の小刀も同寺に寄附しけると

なん。又大佛九郎夫婦が集めをきたる金は相模入道一門の自殺ありし東勝寺に寄附し、濡髪の名笛楊貴妃の身摺の名香のなごりも同寺におさめて寺寶とす。僕露助は武士に取立てられて餘五郎に仕へ、妻於關と共に益々忠勤を勵みぬ。僕夢平も武士になりて庄司に仕ふ。玉兔之助は衆僧を供養して、白拍子都、動之助等兩人の菩提の爲とに、餘五郎は紀州高野山に祠堂金二百兩をおさめ、祖父の靈を祭りて前の罪をあがなひ、又十字兵衛が靈を祭ること懇なり。蛙鳴丸の刀を家寶とし、かの竹の刀は一生守刀にして自ら短氣をつ、しみぬ。山咲窓閑は古今傳授の祕書を南朝の帝に奉り、玉兔之助より扶持を受けて隠者となり、狂言綺語を翻へして、讚佛乘の因、轉法輪の縁として、白拍子都が菩提をとふ事厚し、其名は後世に朽ず、燕子花の句、夏の澤水の句、人口に膾炙して、今の世までも云ひ傳ふ。そも明かなるところには王法あり、暗き所には天罰あり、隱惡といへども必らず報あり。惡人一旦盛んなるも餘殃の風に挫けて其技業を枯し、善人一旦衰

雙 蝶 記 終

へたるも餘慶の春にあひて、再び花咲く時にあへり。皆是天理のしからしむる所なり。されば浮世の興亡榮枯、人生の禍福吉凶、一部の小説に異なることなし。其卷末を見ざれば曉し得ることあたはず。豈悟らざらめや。

大正六年七月一日印刷
大正六年七月五日發行

〔袖珍繪入文庫第二卷〕
雙蝶記



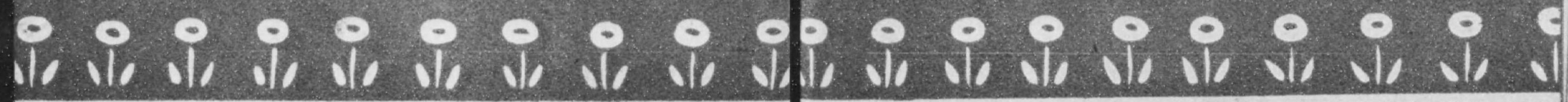
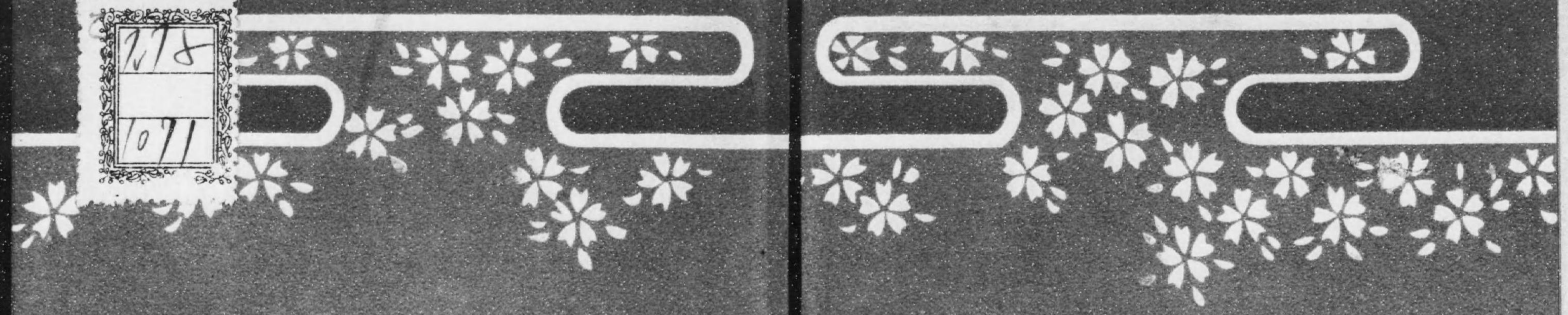
編輯兼發行者 東京市牛込區富久町八十四番地
山田清作
印刷者 東京市牛込區榎町七番地
渡邊八太郎
印刷所 東京市牛込區榎町七番地
日清印刷株式會社

發行所

電話局番町三四六一
振替東京三一五一八

東京市牛込區富久町八十四番地
繪入文庫刊行會

7/78
1071



終

